平成 28 年度

自己点検評価報告書

目　白　大　学

大 学 院

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	国際交流研究科

（１）特筆すべき事項
＜教育活動・学生指導＞
①昨年度に引き続き、平成28年度ＦＤ活動の目標として「研究科全体による論文指導体制の強化」を掲げ、年間を通じて研究科を挙げて論文指導のあり方を検討した。
②ＦＤ活動の一環として、修士論文中間発表会及び最終試験を、学生全員の出席を義務づけ、教員も全員出席を原則として実施した結果、例年同様１年生の出席がやや少なかったものの、教員はほぼ全員が出席して活発な質疑応答と意見交換をおこない、研究科全体で修士論文の指導に当たる体制を一層強化した。
③研究科を挙げた全体指導の強化と並行して、いわゆるゼミを中心とするきめ細かな少人数・個別指導の強化も徹底したことにより、２年次・過年次生20名中17名が修士論文を提出、最終試験に合格した。３名のうち２名は留年、１名は休学であった。
④研究科の広報と社会貢献及び地域連携活動の一環として、また国際交流事業に関する共同研究・研修の場として、国際交流研究科「第２回公開講演会」を開催した。独立行政法人国際協力機構（JICA）企画部国際援助協調企画室長を講師として招聘し、「日本の国際協力とJICAの役割～持続可能な開発2030アジェンダの実現に向けて」というテーマで講演、約100名の参加者があった。
⑤社会学部地域社会学科主催の松本教授・廣田教授「最終講義」に共催・協力し、研究科の学生にも出席を促した。

＜組織マネジメント等＞
①オープンキャンパスで７回、進学相談会で４回、受験生対応をおこない、その他JALP留学生対象説明会も１回おこなった。
②平成29年度入試は入学者16名であり、そのうち多くが中国人留学生であった。質の確保を優先し、定員20名のところ４名充足させることができなかった。
③入試広報部の支援により学生募集のための研究科紹介チラシを制作し、関係者に配布・送付、学内にも掲示した。
④合格した修士論文を製本・管理するとともに、すぐれたものについては要旨を目白大学ホームページ上で公開している。
⑤平成28年度末に定年退職した２名の教員に代わって社会学部から２名の専任教員を補充した。また１名の論文指導補助教員が論文指導教員に昇格した。加えて２名の非常勤講師を交代要員として採用した。

(2)今後の課題
＜教育活動・学生指導＞
①研究科全体による論文指導体制の強化に今後も取り組み、論文指導担当教員のきめ細かな個別指導と中間発表・最終試験における全教員による指導をさらに徹底する。
②修士論文最終試験で合格判定を出したものの、論文の質やレベルの点で必ずしも十分ではないものがあり、論文指導担当教員のより厳しい指導が望まれる。
③修士論文最終試験には１年生の出席も義務づけているが、中国の春節の時期と重なって欠席する者が多く、出席するよう今後も指導を徹底させていく。
④重要な連絡や緊急の連絡のための研究科学生用メーリングリストへの学生の登録がルーズになっており、登録するよう繰り返し指導をおこなっていく。
⑤学生・教職員・一般市民を対象とした国際交流研究科「第３回公開講演会」を開催する。国際交流・国際協力等の分野における実務家を講師に招聘し、国際交流・協力事業の現状と課題について理解を深める。
⑥大学院生の就職活動を支援するために、キャリアセンターとの連携や修了生・同窓生とのネットワークの構築を図る。
⑦2020年開催の東京オリンピックも視野に入れながら、観光・文化・環境などの分野における地域連携や産学連携を通して大学院生が積極的に国際交流や社会貢献に取り組める機会を拡充する。

＜組織マネジメント等＞
①国際交流研究科のベースである地域社会学科の改組を優先させ、研究科のカリキュラムの改訂と修了要件の見直しは先送りにする。
②カリキュラムの改訂としては、グローバル人材の育成や高度職業人・教養人の育成を目的として相応しい科目の新設や国際交流研究に関する学際的オムニバス講義の新設をおこなう予定である。
③修了要件の見直しとしては、修士論文の提出をもって修了要件とする現行のコースのほかに、臨地研究報告書の提出をもって修了要件とするコースを併設する予定である。
④国際交流研究科であるから留学生が多いことは良いとしても、比率が極端に高く、また出身国に大きな偏りがあるので、今後は多様な国々、非漢字文化圏の国々などからの留学生を確保する方策を検討する。
⑤厚生労働省教育訓練支援給付金制度も活用しながら、社会人学生を確保するとともに、本学の卒業生、他大学の新卒生、リタイア世代、主婦など、異文化交流や多文化共生の問題に関心を持つ多様な層からの掘り起こしを図る。
⑥研究科構成員の研究・社会貢献活動の成果の情報発信について、本学地域連携・研究推進センターとの効果的連携の方策を検討する。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	国際交流専攻

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ・修士論文の中間発表(H28.7.29)では諸教員から多くのコメント・アドバイスがあり、論文作成指導に極めて有効だった。最終試験(H29.2.3)では活発な質疑応答がなされた。 ・春学期に教員と学生の個別面接を行い、学生による希望票に基づいて１年次秋学期から履修する課題研究の指導教員の決定を行った。学生と教員のミスマッチを防ぐ上で有効と思われる。 ・留学生には日本あるいは日本と母国に関する比較研究をなるべく行うよう勧めている。 ・修士論文のうち優秀なものについては、要旨を本学の公式ウェブサイトで公表している。 (2)今後の課題 ・学生が他学生の発表内容に関心を持ち、中間発表や最終試験の場で質疑に加われるようにして行きたい。 ・留学生の日本語能力が向上しない憾みがある。 ・臨地研究を推奨する。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ・授業の欠席の多い学生のフォローアップを行った。 (2)今後の課題 ・就職を希望する学生に対する助言・支援の体制を整える。 ・留学生が多いので学園生活や履修方法などについてきめ細かな指導が必要である。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ・JICAから講師の方を招いて「第2回公開講演会」を開催した（H28.7.2）。 ・廣田教授・松本教授による公開講演会を開催した。（地域社会学科主催、国際交流研究科共催）(H29.1.28) (2)今後の課題 ・JICAや自治体などとの連携により、国際交流に関するプログラムを推進する。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ・研究科紹介のチラシを作成・発行した。 (2)今後の課題 ・就職先については学位授与式時に確認しているが、その後のフォローが不十分である。 ・アルバイトの状況もできるだけ具体的に把握できるようにする。
その他	(1)特筆すべき事項 特になし (2)今後の課題 ・修了生の就職先などの情報を取得できるようにする。 ・修了生との交流の輪を広げる仕組みを作る。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	心理学研究科

(1)特筆すべき事項
【教育】
①心理学領域の初めての国家資格「公認心理師」養成のカリキュラムが所轄官庁から正式に公表されていないので学部・大学院ともまだ求められるカリキュラムへの準備ができていないが、本学は、なんとか対応できそうである。
②本学が、「公認心理師」と「臨床心理士」のダブルライセンス取得ができる大学・大学院をめざすか、公認心理師の受験資格取得に主眼をおくべきか、まだ情報が十分でないので方向を決められない
③平成２９年７月に、公認心理師の所轄官庁から大学関係者への説明会が予定されており、その前後に対策を立てることになる。

【学生指導】
①入学後に体調不良や研究論文に難儀して休学や修了延期（留年）する学生が増えているので、入学時の適性や能力の評価には一層の注意を要する。

【社会貢献】
①各教員は、学内の実習施設での心理相談活動を通じて、またそれぞれの専門的研究を通じて社会貢献を行っている。

【組織マネジメント】
①学部および大学院において公認心理師養成に求められるカリキュラム作成のための準備委員会を組織した。
②学部に心理カウンセリング学科を有し教員の専門領域が幅広いので十分対応できると思われるが、実習関連施設を確保すること、指導教員を補充する
③教員の転出や産休・育児休暇取得者が続き、科目担当者の調整に苦慮している
④大学院博士課程の担当教員を補充して充実を図った

【その他】
①臨床心理学専攻は、臨床心理士養成指定大学院として総合評価Ｂを取得した。

(2)今後の課題
【教育】
①公認心理師養成のための新カリキュラムは、学生に不利益にならないようにするために平成30年度からスタートさせる。
②大学院の入試制度を、学内からの進学者を増やすための推薦制度を含めて改善する

【学生指導】
①休学者や留年者を減らすために一層きめ細やかな入口（選抜方法）と出口（研究論文作成・修了試験）対策が必要である

【社会貢献】
①個々の教員の貢献だけでなく、研究科全体としての貢献の可能性を探る

【組織マネジメント】
①平成29年度で辞職する教員が複数予定されているので、平成30年以降の新しい心理学科心理学研究科を構想して、新教員を計画的に幅広く募り採用をする。
②公認心理師のための新カリキュラムの導入を好機として、教員組織も同時に弾力的に運用できるように改革する。

【その他】
①心理学研究科では昼夜開講を求める（社会人）学生は極めて少数である。公認心理師では、臨床心理士同様に日中の心理実習が重視されているため、ますます昼の時間帯に授業が集中する。現在の昼夜開講制を維持するメリットはほとんどない。
②大学院で心理職（公認心理師・臨床心理士・臨床発達心理士など）受験資格取得を希望する、質の高い受験生を確保するためには、昼夜開講制は障害となっている。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	現代心理学専攻

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 平成28年度の大学院中期目標：教育では、①学生の受け入れ方針を明確にする②学生の実態にあった受け入れのあり方や教育内容を検討する③海外からの留学生や若手研究者の受け入れ、本学の大学院生の海外留学を推進するための体制を検討する、があげられていた。それを受けて心理学研究科現代心理学専攻では、現在の現代心理専攻の院生の特徴について話し合いを行った。その話し合いの中で、この数年、院生のレベル低下が進んでいるのではないかという意見が出された。したがってそうした学生の実態に合わせて教育内容の再検討を行う必要性があるとの共通認識で一致した。その低下の理由の一つには、本学の学部からあがってくる院生たちがレジメ等の作成やプレゼン方法を十分に訓練されてきていないことと関連しているのではないかという意見が出された。 (2)今後の課題 ①「公認心理師」の資格にともない学部および大学院の改組が必要になってきている。そのために臨床心理専攻と共　に大学院のカリキュラムおよび専攻科目構成を考える必要がある。②現代心理学専攻のこれまでの特徴として、社会人学生と学部からの学生がバランスよい人数で入学してきているという点があった。しかし数年前から社会人学生の入学希望者が少なくなってきている。今後、どのように社会人に対して目白大学大学院現代心理学専攻をアピールしていくかが課題である。③入学募集定員を含め再検討する必要があると思われる。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ①平成28年度に修士号を獲得して卒業した学生に対し、各教員熱心に指導を行った結果、今年度も質の高い修士論文を提出させることができた点は大いに評価できる。 (2)今後の課題 ①専攻には学部から直接進学してきた学生が増えてきている。こうした学生は、学部時代に就職活動を経験してきていないことが多く、大学院進学後の1年目には就職活動をする必要があるにもかかわらず、活動をしている院生はほとんどいない現状にある。大学院での勉強と同時に進路指導も行うことが今後の課題である。 ②臨床発達心理士の受験資格を目的に本専攻に入学してくる院生が増加してきている。平成29年度には10名の院生中、6名は本資格を取りたいといっている。そうした院生への実習先紹介や資格紹介を行っていく必要がある。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ①平成28年度は、現代心理学専攻と臨床心理専攻の合同開催学科講演会として、本学で博士号を取得された野澤桂子先生に来ていただいた。野澤先生は、現在、がんセンターに日本で初めての「アピアランス外来」を設立され、がん患者さんの外見変化への支援をなさっている方である。本学の卒業生で社会的に活躍されている方をお招きし講演をしていただけたことは、院生にとって有益であったと思われる。 (2)今後の課題 ①目白大学大学院の主催で上記の野澤先生による講演会のような企画を一般の方々に向けに実施し地域・社会的貢献ができるように、今後、していきたいと考えている。 ②卒業した院生たちがどのような仕事をし社会的貢献をしているかを把握することも今後の課題としていきたい。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ①公認心理師の国家資格化に対応していくための準備をすすめるために、現代心理専攻と臨床心理専攻の両専攻をどのように再編成するかについて数度にわたって会議を行った。両専攻の教員との意見交換や教員の仕事分担・負担などについてが話し合われた。 (2)今後の課題 ①渋谷昌三教授が平成28年度をもって退職された。社会心理学の領域で非常に大きな貢献をされてきた渋谷先生であったため、退職後も非常勤講師として本学大学院での授業を依頼しようとしたが、大学の方針として定年後の教員は非常勤であっても依頼はできないとの説明をうけた。専門性が高い大学院教員は、退職後であっても授業担当をしていただけたら、院生および入試戦略の面でも有益ではないかとの見方もできるのではないだろうか。 ②平成29年度は、渋谷先生の後任として大学院レベルまでを教えられる教員が見つからなかったため、授業は閉講とした。 ③平成29年度は、学科専攻のFDを実施し新しい大学院の構想を考える機会を増やしていきたい。
その他	特記事項なし

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	臨床心理学専攻

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ①平成28年度の臨床心理士資格試験の合格率は、受験者31名中19名が合格し、合格率は61.3%であった。なお現役に限ると16名中12名が合格し、現役合格率75.0%は全国平均の62.8%を上回った。 ②平成29年3月に、臨床心理士資格試験現役合格者2名による講演会を開き、ほぼ全員の学生が聴講して指導を受けた。 ③修士論文のための研究の中で、大学の倫理審査が必要な研究については、2専攻合同で倫理審査委員の教員が指導した。 (2)今後の課題 ①臨床心理士資格試験では、現役学生の合格率はコンスタントに全国平均を上回る成績を収めているが、少数であっても多重浪人（過年次生）が存在している。 ②公認心理師養成のためのカリキュラムは、遅くても平成29年半ばには確定される予定であるため、本学の大学院が他大学に後れを取らないように、また学生が不利益を受けないように万全の対策をとる必要がある。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ①大学院ではじめて心理学を専攻する院生には、学部の授業により個別に補うように指導するとともに、ゼミにおいて教員が補講した。 ②学内の実習施設（心理カウンセリングセンター）における個人情報保護の仕組みを根本的に見直し、実習マニュアルを大幅に改定した。 ③日本臨床心理士認定協会の実地視察を受け、視察担当者から実習施設の運営特に個人情報の管理が徹底していると高く評価された。 (2)今後の課題 ①修士論文の作成に難儀して休学したり、修了を延期する学生が出てきている。入学試験時の適性や能力の判断に一層留意する必要がある。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ①臨床心理学専攻の教員は全員が学内の心理カウンセリングセンターの相談員を兼ねており、公開セミナーの講師や心理相談の担当を通じて地域社会活動に貢献している。 (2)今後の課題 ①教員の多重役割による心身の負担感が増しており、心身の不調を訴える教員もいる。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ①日本臨床心理士資格認定協会の実地視察では、実習施設の運営および個人情報の管理で高い評価を受けた。 ②平成28年度の臨床心理士養成指定大学院としての総合評価はＢであった。これは5年前の評価がＣであったので、改善努力がを評価された。 (2)今後の課題 ①平成29年7月には公認心理師養成のための大学および大学院における必須カリキュラムが公表される予定である。それに対応する心理学研究科全体の改革が迫られている。 ②平成28年度末から平成29年春学期にかけて1名の教員が育児休暇取得した。このようなことは初めてであり、科目担当教員を非常勤で手当てしたり、現職者が兼任したりしなければならなくなった。また平成29年度にも１名の教員が産休に入ったため、在職者の負担が増えた。 ③平成28年度末に数名の教員が退職するため、学科・大学院の将来構想を踏まえて計画的に新規採用しなければならない。
その他	(1)特筆すべき事項 ①平成27年度は、例年に比べて受験生および入学者が激減したため先行きが不安視されたが、平成28年度はほぼ例年通りの受験生を集め、入学者を確保できたので、減少は一過性だったと思われた。 ②予備校主催の大学院フェアには毎回積極的に参加して、受験生の確保に努めている。 (2)今後の課題 ①公認心理師制度はまだ本格的に始動していないため今後どうなるか輪郭が判然としないが、臨床心理士と公認心理師のダブルライセンスの取得を希望する学生が多くなると予想される。 ②学部に心理学科を持たずに大学院だけで臨床心理士希望者を集めている大学院は、修了生は臨床心理士資格試験しか受験できなくなる可能性があるので、学部に心理カウンセリング学科を有する本学大学院には学生の人気が高くなると思われる。その本学の利点を生かして、ダブルライセンスが取れることを特色として打ち出し、組織改革していくべきである。 ③昼夜開講制は、（現役の）学生のニーズが低いこと、教員の負担が重過ぎること、などデメリットが多く廃止すべき時期に来ている。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科(博士)用評価シート	組 織 名 称 (評価単位名称)	心理学研究科(博士後期課程)

自　己　評　価　※箇条書きにて記入
(1)特筆すべき事項 ①平成28年度は1名に博士号を授与した。 　浜田陽子「外食チェーン店舗のリーダーシップ・プロセスに関する検討―リーダーシップ行動およびフォロワーシップが店長の職務満足に与える影響―」 ②小池眞規子教授を指導教授に、今野裕之教授を指導補助教員に昇進させ、博士課程担当教員の充実と世代交代に備えた。 (2)今後の課題 ①学会誌への査読付き論文の積極的投稿 ②博士課程在籍学生を大学院修士課程のＴＡに採用し、経済的支援と同時に、修士論文の指導を通じて教育経験を蓄積させる ③博士課程在籍中に学位請求論文を完成させるように引き続き指導していく。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	経営学研究科

(1)特筆すべき事項
研究能力の高い教員を採用したため、国際会議での発表が増えた。また、科研費審査で教員が表彰された。

(2)今後の課題
教員の研究能力の向上を図るとともに、外部競争資金の獲得に努力しなければならない。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	経営学研究科

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 少人数によるゼミ形式個別教育ができた。 (2)今後の課題 経営学研究科であるので、理論教育と実践教育のバランスを改善することが課題である。
学生指導	(1)特筆すべき事項 学生の出身国に配慮して、講義、ゼミの語学レベルを調整した教育を行った。 (2)今後の課題 学生のレベルを短期間でどのように引き上げるかが課題である。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 社会貢献できるレベルに達していない。 (2)今後の課題 社会貢献をするための組織づくりとその設計が課題である。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 大学院のFDを実施して、教員間のレベルの均質化を図った。 (2)今後の課題 教員の研究能力の向上と教育能力の向上を図ることが課題である。
その他	(1)特筆すべき事項 特になし (2)今後の課題 特になし

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科(博士)用評価シート	組 織 名 称 (評価単位名称)	経営学研究科(博士後期課程)

自　己　評　価　※箇条書きにて記入
(1)特筆すべき事項 経営学博士取得者が１名出た。 (2)今後の課題 経営学博士の取得者を今後も育成することが課題である。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	生涯福祉研究科

（１）特筆すべき事項
【生涯福祉研究科の課題と展望を検討する取り組み】
① ワーキンググループによる検討
生涯福祉研究科の入学生の増加を目指して、一昨年度に立ち上げた研究科の課題を討議するワーキンググループを今年度も継続した。
今年度は、前年度に各教員が調べて報告した他大学大学院の状況、アンケート調査、施設管理者への聞き取りから、社会人が入学しやすい入試形態の一つとして、入学時期を春学期と秋学期から選択できるようにすることを決め、平成30年入学者から適用することになった。
【生涯福祉研究科の周知を図る取り組み】
① 生涯福祉研究科主催の公開シンポジウムと公開講座
今年度は、2017年2月21日（火）に公開講義「ベーシックスンカムとこれからのくらし」をテーマに立正大学金子充准教授の講義と討論を行った。そのほか、子ども学科公開講座の山野良一名寄市立大学教授「子ども貧困：その構造」の講演と討論、第39回総合リハビリテーション研究大会の第5分科会を「介護予防をめぐる今日的課題【目白大学　共同企画プログラム】」を協賛の形で公開講義として実施した。
② 人間福祉学科および子ども学科の卒業生に対する大学院紹介のＤＭの配布
一昨年度から入試広報グループの協力を得て人間福祉学科はニュースレター、子ども学科はリーフレットで各学科の卒業生に対して生涯福祉研究科の紹介及び入学のお誘いを配布した。
③ 研究会･フォーラム・研修会などへの協賛
学内で開催された「子ども学科主催の公開講座」、「学内ＮＰＯ法人障害者就業生活支援開発支援センターGreen Work21研修会」、リハビリテーション学研究科フォーラム、第39回総合リハビリテーション研究大会に協賛して生涯福祉研究科名を明記した。
【研究指導の強化】
① 倫理審査の仕組みと申請に関わる講義
修士論文の作成予定の大学院生に倫理審査委員の教員が、倫理審査の仕組みと申請方法を丁寧に講義し、院生自らが申請できるようにした。
② 院生との懇談会の実施
大学院生の学習環境を整備する一環として、デザイン発表や中間発表、修士論文の終了後、計3回、院生と教員が懇談して、学習及び生活上に不都合がないか意見交換をおこない、その結果を大学教務部大学院担当に伝えて改善を依頼した。
③ ハラスメント対応
院生の修士論文指導などにおいて、ハラスメントと受け取られかねないよう言動に注意すること、入学を許可した院生は、論文指導教員だけではなく、研究科全体で指導する意識を持つことを申し合わせ、ハラスメント防止を意識した議論を行った。
④ 認定介護福祉士の科目として「生活支援方法特論」を認証機構へ申請した。このことで、介護福祉士資格を有する受験者の入学にもつなげたい。
【他研究科との連携】
① リハビリテーション学研究科の授業の聴講
一昨年以降、リハビリテーション学研究科の配慮で、研究法を担当される木下康仁立教大教授「修正版グランデッドセオリー」の講義を院生、教員が受講できた。
② 他研究科との時間割情報の共有化
心理学研究科、リハビリテーション学研究科と時間割情報を共有し、院生が受講できないことのないよう、また、資格取得に不利益が生じないよう連携して時間割を作成した。
【その他】
① 修了生
今年度は、過年生を含めて６名が修士論文を発表したが、高齢の院生１名が修士論文不合格となり、５名が修了した。社会人に対する修士論文の在り方を検討する必要性が確認された。
② 入学試験合格者
今年度の入学試験において、６名を合格とした。そのうち、中・高年の社会人が４名おり、今後の教育と指導の在り方も検討する必要がある。また、中国および目白大学を修了した修士号取得者２名が博士課程進学を目指して研究生として合格した。

（２）今後の課題
【応募者・入学者数の確保】
① 生涯福祉研究科の魅力を周知する活動
生涯福祉研究科の魅力を周知する一環として、公開シンポジウムの他に公開講演会を年２回実施する。これらの活動を学生、卒業生、院生、他大学、実習施設、地域の社会福祉施設などへチラシなどで周知を図る。また、目白大学で開催される福祉関連の研修会にこれまでと同様に協賛するようにする。
② 学科の卒業生へリカレントの周知
学部学生に対して、学部1年生の時期から目白大学に大学院があることを周知する、また、既卒者へ学科のニュースレターや同窓会報などを通して働きながらリカレントすることの意義を伝えて学びを促す、などを定期的に行い、入学者の確保につなげる。
③ 福祉施設と連携して社会人入学者の確保を検討する
福祉施設運営者の意見を聞きながら大学と福祉施設で連携して福祉施設から職員を派遣しやすい、社会人が入学しやすい仕組みを検討する。
④ 資格のキャリアアップに応える仕組みを検討する
これまで申請できなかった認定社会福祉士認証・認定機構へ認定社会福祉士の資格取得に関わる大学院の科目の認証をワーキンググループで検討して複数科目を申請するようにする。その手続きには資格支援室に協力を依頼する。
【大学院教育】
① 図書購入費の更なる活用
昨年度、教員の図書購入を初めて行ったが、今年度も担当教員の変更と図書館の協力を得ながら、有効に図書の購入を推進する。
② 大学院教育科目の見直し
社会状況やソーシャルワーク学校連盟が求めている大学院教育を念頭におきながら、大学院教育や生涯福祉研究科の立ち位置を確認し、社会人が求めるカリキュラム構成、修士論文の在り方、福祉施設と連携した実践的研究など、他大学の情報収集もふまえてワーキンググループで検討し、研究科全体で方向を定める。
③ 倫理審査のスケジュールの改善
修士論文の指導が倫理審査のスケジュールに縛られること、申請から審査結果が出るまで２～３ヵ月を要すること、倫理審査担当教員は各学科の教員であることなどの課題があり、修士論文の作成と指導が柔軟に対応するために、対応の改善を心理学研究科と連携して大学に求めていく。
④ 他の研究科との情報や研究の交流と連携および近隣大学や外国の大学との交流
留学生も在籍するなど福祉に関わる国際交流や生涯福祉研究科の教授の交流がある韓国江南大学など社会福祉教員と交流を発展させたい。
⑤ 修士論文の公表
大学院修了後に作成した修士論文を学会発表や投稿を指導するとともに、学内でも投稿できるような仕組みを検討する。
【研究科組織と運営】
① 教員人事
教員人事は、専任教員の全員が学部学科の人事が優先され、大学院の授業科目や研究指導に人事もそれに従わざるを得ない難しさがある。したがって、科目によっては大学院専任の特任教員を採用するなど、より質の高い教育を可能する仕組みが必要であろう。今年度は、保育学の研究指導、科目講義の教員が少ないため、子ども学科の教員で担当教員を充当する。
② 兼任講師の選任
ソーシャルワーク論の担当教員の退職に伴い、その後任を非常勤講師も含めて至急に決める必要がある。
③ 役割の分掌
大学院教育の一層の充実に向けて、研究科における教員の役割と分掌、責任を明確化すること、大学院事務と情報を共有することが重要である。なかでも、教員の大学院に対する意識と指導･運営に積極的に関わる姿勢が課題である。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	生涯福祉研究科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項： ① 教育全般について:福祉というテーマを教育しているが、保育学から老人福祉学にいたる生涯発達の視点が貫かれている。学生は生涯のある時期の福祉を学習・考察するさい、乳幼児から死にいたる発達の側面から学習・考察することを学ぶ。より具体的には乳幼児の虐待、子育て支援、保育学から児童福祉学さらに老人福祉学・介護学などが、系統的に授業として配置されている。この側面は、平成28年に特異的に特記すべき点ではなかったが、本研究科が歴史的に保持している特記すべき事項である。 ② 個別の事項：ｉ）上の哲学に従って、２つの公開講座を主催あるいは共済した。１つは、子ども学科との共催の「子どもと貧困」をテーマとしたもの、２つ目は当研究科主催の「ベイシックインカム」をテーマとしたものである。ともに、福祉と発達の視点が明確なテーマであり、学生もこれらに参加し、学んだ。ⅱ）定員を20名から10名にした：現実で気であり、個々の学生により充分な指導が可能となる。 （2）今後の課題： ① 上記の教育哲学をより洗練化した形で実現する必要がある。例えば、老人福祉、児童福祉、乳幼児福祉専門の教員が、福祉について議論する講義のセッションを作る。公開講座や公開講義で、生涯福祉の観点を明確に打ち出したテーマを選定するなどの工夫である。 ② 福祉の現場でより具体的に役にたつ実践重視の教育をより充実する必要がある。福祉の現場での就労の経験があるか現在も仕事をしている学生も多い。現場での体験を講義で議論するなどの工夫も必要かもしれない。
学生指導	（1）特筆すべき事項： 個別の指導に加えて教員全体が学生の研究を支援する。年間２回の研究デザイン発表会と中間発表会が行われる。その際、学生は自身の研究について指導教員以外の教員と研究科全体の学生との議論の機会を得る。デザインの洗練化、現実性を高めること、さらには学生の研究についての動機を高める機能がある。 （2）今後の課題： ① デザイン発表会での課題：デザイン発表会で、先行研究のられつで自分の発表時間を使い果たしてしまう学生も多い。デザイン発表や中間発表をより充実してものにするために、事前の個々の指導教官の発表に対する教育をより強化する必要がある。 ② 留学生の日本語能力に対する対策：これまでの努力されてきたが入試時点での留学生の日本語能力にたいする評価をより高める必要がある。また研究科に所属した後も、基本的な福祉概念や用語について学ぶため、いままで以上に学部授業への参加を促す。
社会貢献	（1）特筆すべき事項： ① 公開講座・講義の実行：すでに記したように本学科の教育哲学にのっとった公開講座・講義を実行し、地域の福祉職の方々や住民の教育・啓蒙に貢献してる。 ② 大学が新宿区と福祉分野で協定を結んでおり、特に、認定介護福祉士の認定科目に「生活支援方法特論」を申請したので、地域の介護福祉士の資質向上に貢献できる。 （2）今後の課題： とくに②の地域連携協定をより生かした、当研究科の貢献が期待される。特に、地域の高齢者施設に従事する介護職のリカレントにつながるような仕組み作りが課題である。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項： 研究科内の役割の分掌を明確化し、各教員にその役割を果たすように絶えず周知した。 （2）今後の課題： ① 昨年度退職者1名の後任として、本年度着任した人間福祉学科教員を次年度から研究補助および科目担当とすることとした。また、今年度退職した教員2名については、担当科目を非常勤講師で充足することとした。 ② 保育学の修士論文担当教員の該当者がいないため、次年度に着任する子ども学科教員のなかから検討する必要がある。
その他	(1)特筆すべき事項 特になし (2) 今後の課題 特になし

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	言語文化研究科

(1)特筆すべき事項
【教育】
①英語・英語教育：H27年度の修了生が英語教育関連の一般雑誌に研究成果を報告した。
②日本語・日本語教育：他大学大学院から研究助成を受け、複数の院生が研究会・ラウンドテーブルに参加した。
③中国・韓国言語文化：専攻から２つの学位を授与できる規定が維持・運用されている。

【学生指導】
①英語・英語教育：学生が、将来に対する不安、なかなか進まない研究等に苦しみ、心身の健康を害する例があるが、専攻教員全員で問題を共有し、対処した。
②日本語・日本語教育：(a) 修士論文の基準が異なって認識されている点があったため、教員間で評価基準を再確認した。(b) 留学生に一定の日本語力を確保して指導ができるように、入学試験の面接時に簡易版OPI (ACTFL Oral Proficiency Interview)形式を取り入れた。これにより留学生の日本語口頭能力を測定する材料が増えた。
③中国・韓国言語文化：韓国(梨花女子大学校大学院)からの交換留学生1名を本専攻に受入れることができた。

【社会貢献】
①英語・英語教育：専攻教員が単著、国内外の雑誌論文・学会発表において研究成果を発表し、講演ならびに投稿論文の審査によって社会貢献している。
②日本語・日本語教育：(a) NPO法人子どもLAMP(Language Acquisition Research Project：文京区) 「外国人児童生徒の教科・日本語・母語支援」の活動を行った。(b) 小平市花小平公民館にて「古典を楽しむ会」、「古典の会」を主宰し、指導を行った。
③中国・韓国言語文化：専攻教員が国内外の講演活動、学会活動を行っている。また、国内外における各種「韓国語スピーチコンテスト」で審査員を務め、さらに、各種「韓国語検定」の業務をこなしている。

【組織マネジメント】
①英語・英語教育専攻専攻：入学定員の充足ができていないため、閉講となる授業が見られる。
②中国・韓国言語文化：(a) 論文指導教員4名、論文指導補助教員3名が確保されている。(b) 中国言語文化関連分野の論文指導補助教員が検討されている。

【その他】
①英語・英語教育専攻：専攻教員による複数の研究課題が科学研究費補助金を獲得している。
②日本語・日本語教育専攻：公益社団法人日本語教育学会を目白大学で開催した。日本語教育関係の専任教員などで実行委員会を立ち上げ、日本語教育学会事務局、学会の各部署と連携・協力して組織を運営した。これに加え、大会当日はJALP非常勤講師、日本語・日本語教育学科の学部学生、院生などが運営業務の補助を行った。大会は、国内、海外からの多くの研究者、日本語教育関係者などが来場し、盛会であった（来場者数：1，259人）。大学院生は多くの研究者と交流することができ、様々な研究を知る機会となった。
③研究科：今年度入試問題は早期に検討され、作成された。

(2) 今後の課題
【教育】
①英語・英語教育：新入生1名が入学直後に研究テーマを大きく変更する事態となり、論文指導が困難になっている。入試における選考に十分留意すべきである。
②中国・韓国言語文化：(a) 中期計画では、中国言語文化関連分野と韓国言語文化関連分野とがそれぞれ独立することが求められている。(b) 中期計画では、「東アジア」の視点を拡大し、「学際カリキュラム」を構成することが求められている。
③研究科：中期計画では、博士課程の設置に向けて努力を継続することがうたわれている。

【学生指導】
英語・英語教育：幸い、英語・英語教育専攻は学生数に対して教員が多いので、きめ細やかな指導が可能である。日本語が不自由な留学生に関しては、受講生の希望に応じて英語で授業を行うことを考えても良い。
中国・韓国言語文化：(a) 博士課程に進学する修了生があるので、これを本学で受け入れたい。(b) 学位授与に値する学生を着実に育成したい。(c) 大学院において交換留学制度を定着させるには、博士課程の設置が望まれる。

【社会貢献】
① 国内外における講演活動等、社会貢献が滞りなくできるように、業務の効率化が求められる。
② 学会活動が滞りなくできるように、業務の効率化が求められる。

【組織マネジメント】
①中国・韓国言語文化：(a) 中期計画・大学院の将来構想により、中国言語文化関連分野と韓国言語文化関連分野との分離が求められている。(b) 中期計画により、大学院博士課程の設置に向けた努力の継続が要請されている。(c) 中期計画により、「4＋1」といわれる学部と大学院との五年一貫した修士課程の設置が計画されている。
②研究科：(a) 中期計画により、「学際カリキュラム」の構成が要請されている。(b) 入学定員確保(英語・英語教育)へ向けて研究科全体の具体的な方策を打ち出す必要がある。

【その他】
①学部に連動して、大学院においても人事の在り方が検討されることになる。
②大学院入試業務に一層の注意が必要になる。
③国立大学等の上位校でも、大学院受験をWeb上の情報から決心する場合が少なくないので、院生（修了生）、教員の研究成果をWeb上で積極的に広報することを始めた。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	英語・英語教育専攻

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 昨年度の修了生が英語教育関連の一般雑誌に研究成果を報告した。 (2)今後の課題 ①　新入生1名が入学直後に研究テーマを大きく変更する事態となり、論文指導が困難になっている。入試における選考に十分留意すべきである。 ②　体調を崩して、研究を中断せざるを得ない学生があった。大学院生は修了後の進路に大きな不安を抱えているのが通例で、心身の健康を維持することが難しい。教員の活発な研究態度が学生に勇気を与えると考えられるので、教員のより活発な研究活動が望まれる。
学生指導	(1)特筆すべき事項 学生が、将来に対する不安、なかなか進まない研究等に苦しみ、心身の健康を害する例があるが、専攻教員全員で問題を共有し、対処した。 (2)今後の課題 幸い、英語・英語教育専攻は学生数に対して教員が多いので、きめ細やかな指導が可能である。日本語が不自由な留学生に関しては、受講生の希望に応じて英語で授業を行うことを考えても良い。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ①　専攻教員が大学教育の現状と将来を詳細に論じた著書を出版し、関連各方面の注目を集めた。 ②　専攻教員により国内のみならず海外の学術誌に論文が発表されている。 ③　専攻教員により国内のみならず海外での学会発表が行われている。 ④　専攻教員の論考が初等教育に関する図書で発表されている。 ⑤　専攻教員が他学での公開シンポジウムに招かれ講演を行った。 ⑥　専攻教員が学術誌投稿論文の査読を行っている。 (2)今後の課題 教員のより一層活発な研究活動が公表されるべきである。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 入学定員の充足ができていないため、閉講となる授業が見られる。入学定員確保へ向けて研究科全体の具体的な方策を打ち出す必要がある。 (2)今後の課題 定員の充足に向け、専攻の構成員全員が協力して入試広報活動を行う必要がある。また、ここ数年、入学者数は低迷を極めているため、中国・韓国言語文化専攻の専攻分離とあわせ、定員5名への変更を予定している。
その他	(1)特筆すべき事項 ①　専攻教員による複数の研究課題が科学研究費補助金を獲得している。 (2)今後の課題 国立大学等の上位校でも、大学院受験をWeb上の情報から決心する場合が少なくないので、院生（修了生）、教員の研究成果をWeb上で積極的に広報することとした。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科(修士)用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	日本語・日本語教育専攻

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ・昨年に引き続き福井大学大学院が主催する「実践し省察するコミュニティー ラウンドテーブル」から研究助成を受け、目白大学大学院生2名が参加した。また、「学びを培う教師コミュニティ研究会」が主催するラウンドテーブル型教師研修にも参加し、継続してラウンドテーブルに参加する意味を検討した。 ・修士論文の内容をまとめ、日本言語文化研究会に応募できるように指導した。 ・学部主催の「日本語教育専門家によるテーマ別講演会」に大学院生も参加させた（全4回：漢字指導、ビジネス日本語教育、中国の日本語教育、海外の日本語教育）。 (2) 今後の課題 社会人（日本人）と留学生院生が混在している授業などでは、其々が持っているリソースをうまく活用できるようにしたい。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ・修士論文の基準が異なって認識されている点があったため、教員間で評価基準を再確認した。 ・留学生の一定の日本語力を確保して指導ができるように、入学試験の面接時に簡易版OPI（ACTFL Oral Proficiency Interview)形式を取り入れた。これにより留学生の日本語口頭能力を測定する材料が増えた。 (2) 今後の課題 引き続き修士論文の合格基準、形式などを教員間で統一していきたい。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ・NPO法人子どもLAMP(Language Acquisition Research Project：文京区）「外国人児童生徒の教科・日本語・母語支援」の活動。　・小平市花小平公民館にて「古典を楽しむ会」、「古典の会」を主宰し、指導を行った。 (2) 今後の課題 地域に開かれた大学として、大学近隣の公立小学校、教育機関などと連携を図っていきたい。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 北京日本学研究センターとの共同研究を進めている。具体的には日中の教員と大学院生が同じ研究テーマで連携しつつ交流を深めている。 (2)今後の課題 国内外の他大学院の日本語教育研究関係と合同ゼミなどを積極的に計画していきたい。
その他	(1)特筆すべき事項 公益社団法人日本語教育学会を目白大学で開催した。日本語教育関係の専任教員などで実行委員会を立ち上げ、日本語教育学会事務局、学会の各部署と連携・協力して組織を運営した。これに加え、大会当日はJALP非常勤講師、日本語・日本語教育学科の学部学生、院生などが運営業務の補助を行った。大会は、国内、海外からの多くの研究者、日本語教育関係者などが来場し、盛会であった（来場者数：1，259人）。大学院生は多くの研究者と交流することができ、様々な研究を知る機会となった。 (2)今後の課題 院生が学会で関連分野の研究者や専門家と交流し、研究発表ができるような指導体制を取っていきたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	中国・韓国言語文化専攻

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ①中国言語文化関連分野と韓国言語文化関連分野とが、それぞれ修士の学位を授与できるようになっており、これが維持されている。 ②中国・韓国研究を基層とし、「東アジア」全体を視野にする広範囲の学習を可能とする諸科目が設置されている。 ③入学定員10名に相当する合格者を出した。 (2)今後の課題 ①中期計画では、中国言語文化関連分野と韓国言語文化関連分野とがそれぞれ独立することが求められている。 ②中期計画では、「東アジア」の視点を拡大し、「学際カリキュラム」を構成することが求められている。 ③中期計画では、博士課程の設置に向けて努力を継続することがうたわれている。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ①韓国（梨花女子大学校大学院）からの交換留学生1名を本専攻に受入れることができた。 ②現地での研修・研究を推進する「臨地研究」の科目が設置されていて、履修者が継続している。 ③韓国言語文化関連から3名の修士（韓国言語文化分野）の学位取得者があった。 ④中国言語文化関連から2名の修士（中国言語文化分野）の学位取得者があった。 (2)今後の課題 ①博士課程に進学する修了生があるので、これを本学で受け入れたい。 ②学位授与に価する学生を着実に育成したい。 ③大学院において交換留学制度を定着させるには、博士課程の設置が望まれる。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ①中国言語文化関連分野、韓国言語文化関連分野の教員はともに、国内外における各種講演会活動で社会貢献をしている。 ②中国言語文化関連分野、韓国言語文化関連分野の教員はともに、国内外における各種学会活動で役員をこなし社会貢献をしている。 ③韓国言語文化関連分野の教員は国内外における各種「韓国語スピーチコンテスト」で審査員を務め、また、各種「韓国語検定」の業務をこなし、社会貢献をしている。 ④韓国言語文化関連分野の教員は、教職免許更新の講師を務め、社会貢献をしている。 (2)今後の課題 ①国内外における講演活動、社会活動が滞りなくできるように、業務の効率化が求められる。 ②学会活動が滞りなくできるように、業務の効率化が求められる。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ①論文指導教員4名、論文指導補助教員3名が確保されている。 ②中国関連分野の論文指導補助教員が検討されている。 (2)今後の課題 ①中期計画により、中国言語文化関連分野と韓国言語文化関連分野との分離が求められている。 ②中期計画により、大学院博士課程の設置に向けた努力の継続が要請されている。 ③中期計画により、「学際カリキュラム」の構成が要請されている。 ④中期計画により、「4＋1」といわれる学部と大学院との五年一貫した修士課程の設置か計画されている。
その他	(1)特筆すべき事項 ①今年度入試において、定員に相当する合格者数を確保した。 ②今年度入試問題は早期に検討され、作成された。 (2)今後の課題 ①学部に連動して、大学院においても人事の在り方が検討されることになる。 ②大学院入試業務の点検が必要になる。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	看護学研究科

(1)特筆すべき事項
【教育課程】
①平成28年4月より、看護学研究科の共通科目変更を骨子とする教育課程学則変更に基づく新しい科目を実施した。
②新たに配置した科目の履修状況や科目内容の確認を行った。
③長期履修生が1年次より計画的な履修ができるよう論文担当教員が指導した
④倫理審査委員会の開催日程に合わせて、修士論文の年間計画が作成できるよう指導した。
⑤AP・CP・DPの見直しをカリキュラム委員会で行い、新たなAP・CP・DP案を検討し作成した。

【学生指導・入学者選抜】
①入学時より論文指導教員と他教員によるチームティーチングを行い、計画的な論文指導を実施した。
②長期にわたる終了予定者が修士論文を予定通り提出できるよう研究指導を行い成果を出した。
③入学時オリエンテーション時および学年進級時（4月）に教務員より学生便覧による年間行事予定表およびコースアウトラインの説明を行い、学生が履修計画できるよう指導した。
④入試の受験生を確保するために、入試広報課の協力のもと別刷を印刷し、受験希望者に届くよう病院、看護系大学、保健所、市町村に送付した。学部生が就職している実習病院等には、別刷を持参しオープンキャンパス等の周知を行った。
⑤受験生を確保するための入試制度について、研究科委員会で継続審議した。関東近県の看護系研究科の入試情報を収集し、検討の基礎資料とした。

【社会貢献】
①特別講義に修了生が参加できるよう周知し、修了生が修了後も学習活動が継続できるよう支援した。
②看護学研究科の教員組織が実施してる特別研究を7年間継続し、成果を学会で報告した。
③特別研究の成果は、埼玉県彩の国産学共同フェスティバルでブース発表を行った。

【組織マネジメント】
①研究科運営が円滑に進むために、研究科長、研究科主任、ＭＵＳＣ事務室事務職員とが共同で研究科委員会の開催月に定期的に会議を開催した。
②退職教員の後任の教員任用について、看護学研究科教員審査委員会を開催した。研究科の教員任用を学部と連携して、審議した。
③研究科委員会で、中期計画目標と評価を検討し、各委員より提出された審議・報告を行い、教員間で情報を共有した。

(2)今後の課題
①大学院共通課題でもあるAP・CP・DPの変更手続きを行う。
②入試選抜方法を検討する。
③受験生数増加のための広報活動の検討。
④院生より卒業論文提出前（1月）の開講時間延長の要望が出ており、開校時期および時間の検討を、ＭＵＳＣ事務室と協議する。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	看護学専攻

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ・カリキュラムを改正した最初の年なので、新たに作った科目の履修状況や科目内容の確認を行った。 ・AP、CP、DPの見直しを行い、新たなAP、CP、DPを作成した。 (2)今後の課題 ・コアコンピテンシーを検討すること（中期目標に挙げている）。 ・「認定看護管理者受験資格」に関する取扱いの明確化（対象分野、履修科目、修士論文の内容など）。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ・修了予定者すべてが修士課程を修了することが出来た。 (2)今後の課題 ・修士論文の条件を満たすことができる論文作成のために、院生への教育の充実。
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ・特別講義を開催することを修了生に連絡し、修了後の学習活動を支援した。 (2)今後の課題 ・社会的に関心のあること等の講義を行い修了生だけではなく、近隣の人たちにも広報活動を行い、生涯学習の機会を提供する。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ・研究科運営が円滑に進むために、研究科長と運営方針や内容について適宜打ち合わせを行った。 ・教員FDとしてリハビリテーション研究科と共同開催で「質的研究（M－GTA）」に関する講義を開催した。また、看護研究のスキルアップのために、看護研究に関する講義を4回開催した。内容はテキストマイニングの活用、看護歴史研究方法、英文アブストラクト作成手順、研究倫理である。 (2)今後の課題 ・修士論文の質の向上を目指し、教員の指導力をあげる。その為に、研究のスキルアップが図れる環境にする。 ・計画的な教員の充実、かつ、博士の学位を持つ教員の増加。 ・新旧カリキュラムの履修に関する手続きの整備。
その他	(1)特筆すべき事項 ・卒業生や臨床家が受験しやすい入学選抜方法の見直しを提案した。 ・院生の学習環境を整えるために「意見を聞く会」にでた内容を吟味し、開校時間を調整した。 (2)今後の課題 ・入学選抜方法の検討。 ・受験者数増加のための広報活動の検討。 ・開校時期および時間の検討。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	リハビリテーション学研究科

(1)特筆すべき事項
①研究科内の審査および大学院教員資格審査委員会での審議を経て、理学療法学リハビリテーション分野から科目担当として1名、言語聴覚学リハビリテーション分野から研究指導補助教員として1名が、平成29年度から承認された。

②リハビリテーション分野では質的研究法への関心が高いことから、リハビリテーション研究法特論の授業に非常勤講師による授業枠を設定した。他研究科からの聴講も可能としたところ、心理学研究科、看護学研究科教員、生涯福祉研究科の教員や院生等、40人を超える受講があり、ニーズの高さが確認された。非常勤講師の定年退職に伴い、来年度を最後に非常勤講師の辞意が伝えられているので、対処する必要がある。

③秋学期実施の公開フォーラムを「地域包括ケアにおける言語聴覚士の役割」をテーマとして実施した。質の高い内容であり、第26回日本保健科学学会学術集会と同時開催としたため、受講者数は70名を超えて盛況であった。

④修士論文の指導では、構想発表会(5月)、中間発表会(11月)、最終発表会(2月)を実施し、最終試験を経て5名が修士号を取得し修了した。また、1年次および長期履修委の指導を実施し、6名が「目白大学人及び動物を対象とする研究倫理審査委員会」に審査を提出した。

⑥受験生の確保については、引き続き病院・施設、養成校等への広報、および、学会等での広報に努めた結果、平成28年度は理学療法学分野で4名、作業療法学分野7名の計11名が入学した。全員が現職社会人であった。また、受験生の確保のため、関東周辺の専門学校に入試案内を送付した。

⑦学長および事務局長と研究科長および専攻主任で博士後期課程設置について検討を行ったが、修士課程の定員を満たしていないという現状では設置は時期尚早であるとの結論を得た。

(2) 今後の課題
①一層の教育の充実をはかるために、リハビリテーション分野における時代のニーズの変化も大きいところから、引き続き教育内容の検討を続ける必要がある。

②定員の充足、とくに理学療法学分野、言語聴覚療法学分野での入学生増について、さらなる努力・工夫が必要である。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	研究科（修士）用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	リハビリテーション学専攻

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ①2コマ続けての講義・演習を隔週で実施することで、学生と教員の利便を図った。 ②教員審査を実施し、来年度から理学療法リハビリテーション分野1名、言語聴覚療法リハビリテーション分野1名の教員を変更した。理学療法リハビリテーション分野は科目担当教員、言語聴覚療法リハビリテーション分野は研究指導補助教員。 ③研究法（質的研究法）に関する教育を充実するために、非常勤講師による授業の充実をはかった。 ④特別研究の実際の指導状況を反映して、現行の2年次4単位から、１年次秋学期2単位、2年次4単位の計6単位の選択必修科目とするカリキュラム改定を行った。これに伴い、選択科目の履修は8単位以上を6単位以上に改定した。 ⑤障害福祉学研究科、看護学研究科とのFD科目として特別教育支援特論を指定した。 (2)今後の課題 ①教員審査を適正に行い、教員の充実をはかる。
学生指導	(1)特筆すべき事項 ①修士論文指導において、構想発表会（5月）、中間発表会（11月）、最終発表会（2月）を実施、最終試験を経て長期履修（3年）を含む5名が修士学位を取得した。 ②1年次から実質的に論文指導を開始し、プレデザイン発表会を秋学期（11月ないし2月）に実施した後、「目白大学人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会」への申請を行う体制を整備した。 ③研究の種類により、倫理審査を早急に申請する必要がある研究は研究科長に申し出て、プレ構想発表を５月以前に実施できるようにした。 (2)今後の課題 ①1年次からの特別研究の指導開始により、1年生からの指導を充実するとともに、2年生との研究的交流を活発にしたい。
社会貢献	1)特筆すべき事項 ①リハビリテーション学研究科主催の公開フォーラムを10月に開催し、外部講師を招聘して「地域包括ケアにおける言語聴覚士の役割」について日本言語療法士協会会長の深浦順一先生に講演をお願いした。80名を超える参加者を得た。28年度は日本保健科学学会と合同で開催した。 ②フォーラム、公開講演会等は生涯福祉研究科と相互に協賛して実施した。 (2)今後の課題 ①公開フォーラム開催、生涯福祉研究科との相互協賛は今後も継続して、院生の教育に資すると共に社会貢献の機会としたい。 ②フォーラムの周知に関わる周知の方法は改善を要する。 ③29年度も診療報酬の改訂に関する内容で公開フォーラムを開催する予定である。
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ①毎月、保健医療学部教授会の後、リハビリテーション学研究科委員会を開催して（計11回）、情報の共有を図った。 ②教務委員会と入試広報委員会は原則合同で月1～2回開催し（計13回）、研究科運営に関わる企画立案、推進を担当した。 ③研究科予算の立案、執行について研究科長・専攻主任を補佐する担当教員を置き、また予算関係事務が岩槻キャンパス庶務課で可能になるよう申請して、予算執行体制の改善を図った。 (2)今後の課題 ①岩槻キャンパスでの予算関係事務が可能になったので、より円滑な予算執行を実現したい。なお学生からの実験実習費にかかる手続き等は新宿キャンパス教務課で引き続き担当するため、学生にとっての不便は生じない。
その他	(1)特筆すべき事項 ①1、2期修了生のアンケートへの協力を得て、「教育訓練給付金」の対象となる講座への申請を行ったところ、平成27年度入学生から指定講座として内定した。 ②受験生確保、入学生の専攻分野のアンバランスの解消を目指して、リハビリテーション職者の多い病院・施設等への訪問説明会を5月～7月に３回実施した。さらに専門学校等荷も広げる必要がある。 ③博士後期課程の設置について学長、事務局長と検討したが、修士課程の定員充足を図ることが研究科として喫緊の課題であると指摘された。改めてリハビリテーション学研究科修士課程の学生確保に努力するとともに、博士課程についても継続検討していきたい。そのために、博士課程への入学希望等に関する調査を継続して実施した。 (2)今後の課題 ①リハビリテーション3分野（理学療法、作業療法、言語聴覚療法）を基盤とした修士課程学生確保と博士後期課程設置に向けた検討に取り組む。

学部・学科

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	人間学部

(1)特筆すべき事項

【教 育】

① 海外スタディツアー（児童教育学科）、学科行事（子ども学科・児童教育学科）、学科講演会（心理カウンセリング学科・子ども学科）などを通じて、教員や学生の学びを深め、専門家としての資質と能力を育てる取り組みを行った。
② 実習園や実習施設と連携して情報交換･意見交換を行い、質の高い専門家の養成と就職先の確保に努めた（子ども学科・人間福祉学科）。
③ 学生間の学習格差を踏まえて、特に、国語力の把握をPreテストとして日本語検定の活用でおこない、ベーシックセミナーやキャリアデザインに活用する試みを始めた学科もある（心理カウンセリング学科・人間福祉学科）。
④ 各学科とも、学生の実情に応じて学習の定着を目指し、授業の工夫や学生にきめ細やかな対応を検討する動きが見られている。
⑤ 資格・免許に関わる学科では、合格率や採用率も高くなり、資格・免許を活かして就職率も95％を超えた（人間福祉学科・子ども学科・児童教育学科）。
⑥ 聴覚と視覚に障がいを有する学生の入学に伴い、学生の障がい状況に応じた合理的配慮に対応した教育をおこなうよう教員へ周知するとともに、学部、学科、教員が障がい等学生支援室と協力して対応した。

【研 究】

① 各学科で複数の教員が書籍を出版した。
② 新規科研費の採択数は大学全体で15名、人間学部で5名であり、継続を含めると心理カウンセリング学科の7名をはじめ人間学部で13名（転出者1名を含む）が採択された。
③ 各学科の教員が関連学会、さらには国際学会で多数発表がおこなわれたこと、また、学会誌および大学紀要へ投稿も例年よりも多かった。

【学生指導】

① 学生に対して教員が挨拶のロールモデルを示すことで学生のマナーが向上する効果があった（子ども学科）。
② 各学科ともベーシック・セミナー、キャリアデザイン、ゼミなどで、個別面接をすることで課題を抱える学生を早期に把握し、その情報を共有することで適切な対応ができていること、また、アラートシステムの導入もふまえて対応することで退学防止も向けて少しずつ効果を上げている。
③ 実習支援室で実習に行く学生に対して、不安の軽減など丁寧な指導がおこなわれた（人間福祉学科・子ども学科）。

【社会貢献】

① 各学科の教員が、学会、職能団体、協議会などの役員や国および地域の教育委員会、学校などの委員として重責を担って活躍し社会貢献を貢献している。
② 大学が新宿区、高齢者福祉施設などと調印した包括連携をふまえて、学科、教員および学生を交えた活動や社会貢献の場として活用した（人間福祉学科・子ども学科）。
③ 新宿区内の小学校に、教員の指導の下でピアサポーターや学校ボランティアとして、また、保育ボランティアとして学生が学校教育現場などに寄与した（心理カウンセリング学科・子ども学科・児童教育学科）。

【組織マネジメント】

① 人間福祉学科では、定員充足率の低下が続いたため、定員を120名から100名に減らした。
② 今年度実施された大学認証評価において、児童教育学科の充足率の超過が指摘されたが、それ以外では特に問題となる指摘はなかった。
③ 平成28年度入試において、人間福祉学科と子ども学科で定員割れが生じ、心理カウンセリング学科では29名の超過となり、学部全体で99％の充足率であった。
④ 定員を各学科とも学科会議を通じて情報の共有化を図るとともに、学科の教育活動、役割分担の公平化と明確化するとともに教育活動について共通認識をはかっている。
⑤ 教員によってコマ数や委員などの業務に偏りがあり、その状況が長く継続していたのでその改善を図った（人間福祉学科）。
⑥ 学科長会議を定期的に行い、学部内の情報共有や学科間の特徴や課題などの情報を共有するとともに、学部の発展に向けて協力して取り組めた。
⑦ ＬＰ会議の説明会と祖に対する意見を学部でとりまとめて学園法人に伝達することで、学園の発展につながるよう取り組んだ。

【その他】

① 定例教授会において、学部再編に向けて各学科の特徴と課題、高校生へのウリについて学科ごとに発表する機会を持つことで学科間の理解が深まった。
② 学部間、学科間プログラムを各学科が協力して開設につなげ、新2年生に周知をし、申請を受け付けることで学生の学びを広げる道筋作りができた。

（２）今後の課題

【教 育】

① 社会の状況の変化により、各学科の受験者数が学科により変動しており、高校生に魅力ある学科としての特徴をアピールするためにも、授業内容の検討が必要になると思われる。
② 学習に問題をかかえる学生に対して教員間で情報を共有して初年次から早期の対応が求められる。また、障がい学生に対して情報を共有して、教材作成など更に教員の協力体制を作る必要がある（人間福祉学科）。
③ 話し合いを通じて学科の課題を共通理解し、更に、国試合格率を上げ、魅力ある学科、学科のウリをアピールして学生募集につなげる必要がある。
④ 学部全体で初年次教育を充実される必要があり、その一環として日本語検定を活用し、国語教育委員会とも連携して国語力の向上を目指す試みをおこなうようにする。学生の意欲を高める一助として報奨金の周知を徹底する必要がある。
⑤ 新宿区を初め、大学と地域包括した社会資源を教育に活用して学生の学習意欲を高めるアクティブラーニングの仕組みを考える。
⑥ 公認心理師の対応したカリキュラムの編成を緊急にする必要があり、学部改組の視点からも学部全体で理解するようにする。

【研 究】

① 科研費、学内特別研究費など外部資金の申請に積極的に取り組むとともに、その成果を発表することをさらに推奨する必要がある。
② 研究を進める上で、各学科とも教員の持ちコマが多く、研究する時間の確保が厳しい状況にあるので、教員相互にうまく分担しながら研究を活発にしていく必要がある。
③ 学科単位で研究テーマを決めたり、学科の研究力を高めるような取り組みやＦＤによるお互いの研究を知る機会を活用したりして、教員の研究意欲を高めることを試みる必要がある。

【学生指導】

① 退学者、休学者、卒業延期者、学費未納者を減らす方略の検討や復学者へのサポートが重要な課題である。そのためには、学科の特徴をふまえたソフト面からの退学防止を検討することが求められる。
② 卒業後の就職を早期から学生が意識するようキャリアセンターと協働して学生のキャリア形成を支援する必要がある。
③ 障がい学生に対する授業の支援やさまざまなボランティア活動を通じて、相互の実践的な学びにつなげるように障がい等学生支援室と連携する。
④ 卒業生のホームカミングデイを各学科で実施することで、卒業生のアフターケアをするとともに、卒業生の活躍を在校生に伝えたり、高校の進路指導教員や後輩に発信したりすることで、学生募集にもつなげる。

【社会貢献】

① 教育や福祉の現場と連携したり共同研究したりすることで、教員や学生が相互に学び、活用できる仕組みを作る必要がある。
② 消極的な学生に対して、授業やゼミ活動など社会貢献、ボランティアなどを経験できるようにしていく意欲を高める仕組みづくりを検討する。

【組織マネジメント】

① 退職者予定者や学部改組も視野に入れて、各学科で年齢のバランス、必要とする授業科目を考慮し、業績も踏まえて人事構想を立てて適切な人材を確保する。
② 予定されている人間学部改組において、社会のニーズに合った、そして学生、大学にとって意義のある新たな学部学科の開設につなげることができるよう更に検討する。また、改組について学部教職員の共通理解を得て実施できるようにする。
③ 授業担当、ゼミ担当、業務がバランスの取れるような人員の確保と配置を考える必要がある。
④ 話し合いを通じて学科の課題を共通理解し、国試合格率を上げ、魅力ある学科にして学生募集につなげるために、更に検討や努力が求められる。

【その他】

① 非常勤講師との情報の共有と感謝を込めた懇談会を通じて学生の学習支援につなげていく必要がある。
② 障がい学生に対するサポート体制、特に、ノートテイクなどの支援学生の養成、教員に対する共生社会や合理的配慮の理解と実践を絶えず求めていく必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	心理カウンセリング学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①例年通り、学科講演会を2回実施した。 1）2016年7月20日：「困った行動にはわけがあるー発達障害支援の現場からー」林田道子氏（NPO法人発達障害児支援「I am OK」の会の代表／本学大学院現代心理学専攻修了者） 2）2017年1月23日：「大学院で得たもののアウトプット実例ー雑誌編集者×心理学の場合ー」谷畑まゆみ氏（フリーランスエディター＆ライター／ 産業カウンセラー／キャリア・コンサルティング技能士2級／本学大学院現代心理学専攻修了者） ②公認心理師養成を含め、平成30年度以降の心理カウンセリング学科の在り方について、今後の指針・具体的カリキュラム等の検討を行った。 （2）今後の課題 ①心理カウンセリング学科の改組に向け、公認心理師養成カリキュラムを軸に、新たな学科構想を明確に示す必要が急務である。 ②新学科構想に伴う教員募集を早期に実施する。
研究	（1）特筆すべき事項 ①投稿論文数、書籍等出版物については、ほぼ例年同様の成果であった。 ②学会発表件数については、国際学会での発表7件を含む29件であった。 ③科学研究費補助金については、9名の教員が研究代表、4名が分担研究者となっている。 ④特別研究費については、7名が科学研究費申請のための助成を受けた。 （2）今後の課題 ①研究のための時間確保
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①男女ともに就職内定率は96.6％と高かった。 ②本学科は大学院・専門学校への進学希望者が毎年20％前後であることが特徴的であるが、今年度も18％の学生が進学希望であった。 ③単位不足、在学4年未満による卒業延期者は9名であり、昨年度の15名よりは減少した。 （2）今後の課題 ①就職活動の支援を、キャリアセンター委員の教員を中心に引き続き実施していく。 ②大学院進学希望者については、積極的な進学支援が必要である。また、その後のキャリア形成についての指導も行っていく必要がある。 ③卒業延期者については、学生個々の事情に応じた対応を早期より、クラス担任・ゼミ担任を中心に引き続き行っていく。 ④心身の健康状態が不良な学生が各学年一定数おり、クラス担任・ゼミ担任を中心に、必要に応じて学生相談室や障がい等学生支援室と連携して対応していく必要がある。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①ピアサポートの授業では、新宿区と提携し、21名の学生（大学院生3名を含む）が区内21の小学校にピアサポーターとして赴き、スクールカウンセリングの補助を行い学校現場に寄与した。 ②新宿区特別支援教育事業において、3名の専任教員が巡回指導を行った。 （2）今後の課題 ①上記ピアサポート授業を継続する。 ②新宿区特別支援教育事業での巡回指導を継続する。 ③高大連携については、今後の課題である。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①新任の助教が都合により7月で退職することとなったため、秋学期開始までに急遽助教の公募・採用を行った。 ②精神保健福祉士コースの実習を担当していただいていた人間福祉学科教授の定年退職に伴い、本学科所属の専任教員を採用する必要があり、公募・採用を行った。 ③教授退職に伴い、新学科構想を視野に教員の公募を行ったが、時期が遅かったこともあり、採用を来年度に延期した。 （2）今後の課題 ①本学科は役職者が多いため、授業担当、クラス担任・ゼミ担当について、対策を講じてきたが、来年度は2名の育児休業の教員がおり、非常勤教員の採用や、クラス・ゼミ構成の対応が必要である。 ②新学科構想も含め、教員の公募・採用を早期に実施する。
その他	（1）特筆すべき事項 ①公認心理師法案の実施に関する情報収集を積極的に行った。 （2）今後の課題 ①公認心理師養成に関する正確な情報を収集し、在学生、入学希望者に対して適切に伝えていく努力を行う。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	人間福祉学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①　近年、学生の学力差が顕著であるため、授業での工夫が重視されてきており、多くの教員によって単位修得に困難を来す可能性なある学生に対して、小テストやレポートによるきめ細かい講義の理解度を確認する工夫が行われている。 ②　問題とされる学生については、学科会議などで意見交換をしている。また、学年によって異なるが、１・２年生は、必修科目の担当教員との間で、単位未修得学生に対する状況の共有化や意見交換を通して、学生の学習上の問題状況への対応を積極的に進めている。各課程に関する状況も同様で、課程の教員間で情報交換を行っている。 （2）今後の課題 ①　中途退学を防止するためには、教員間の情報共有だけでは解決できるわけではなく、授業内容の工夫やカリキュラムの検討も必要である。また、学年配置の問題や必修科目の検討などをしていくべきである。
研究	（1）特筆すべき事項 ①　個別の教員が研究費の公募などへ積極的にチャレンジしている。しかし、採択には必ずしも至っておらず、継続研究などでの範囲にとどまっている。 （2）今後の課題 ①　研究を長期的に見て行うようにし、今後も積極的に、外部からの研究資金導入の機会を通して、チャレンジすることを目標としていく。科目の数や委員の負担などを考慮して研究体制も確保する必要がある。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①　近年に入試状況の厳しさを反映して、学生間の学習レベルの格差が深刻な問題となっており、学習意欲や問題関心をどのように持って日常の授業への出席へ促していくのかについて、新たに学科会議などで意見が出されている。 ②　3月から4月にかけて、授業料の納付時期でもあるため、大学に長期に来ていない学生への連絡をし、新学期からの大学での学習サポートをベーシックセミナーやキャリアデザインの担任教員が進めている。しかしながら、学生の履修登録のサポートなどで一定の成果を上げているものの、休学や退学となる事案も生じている。 ③　３年及び４年は、専門セミナーや卒論ゼミという集団で個別的な学生の状況を把握し、就職などに関する進路及び学習上の課題のある学生への個別指導を行っている。 （2）今後の課題 ①　今後も学生の情報交換とその対策会議を進めて中途退学を防止していく。資格取得の指導、国試の対策等きめ細やかに対応する必要がある。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①　各教員は、研究との関わりや実習などでの現場との関係を通して、スーパーバイザーや各種の委員会に参加をしながら、目白大学の教員として社会貢献を行っている。 （2）今後の課題 ①　毎年課題として掲げているが、学科として現場との連携や共同研究などが積極的に進められることができればと考える。しかし、夏休みを中心に、実習訪問などの業務があるため、そのような時間的余裕がないのが現状であるため、学科全体で取り組むものも必要である。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①　人間福祉学科の現在的課題は、入学定員確保と国試合格率の向上である。現在、福祉関係の諸大学との競争は激化しており、定員を120名から100名に変更しても70名しか確保できなかった。国試の合格率が少し上がったが、まだ、組織全体で取り組んだ結果とはいいがたい。 ②　このような状況に学科としては、全員で協力して取り組む必要があるが、教員の格差があり過ぎる。学内委員会等、組織運営の観点からみて動こうとしない教員が多いため、経験が浅い教員や断れない教員の負担がますます多くなって少数の教員の研究活動を阻害する要因ともなっている。そのため、自分から学科運営のために動こうとする意欲まで奪ってしまっている。 ③　しかし、28年度は、改組の関連で、人間福祉学科としてどのような学科を求めるのかの話し合いを進めていくことができた。 （2）今後の課題 ①定員確保のために、また、合格率アップのために、学科内の委員会のつながりを作る必要がある。学科会議だけをあてにせず、ホームページ担当、ＦＤ担当、入試広報担当、国試担当、学生委員などの連携をとりホームページや、オープンキャンパスや桐和祭などの機会をどのように活用してアピールしていくのかと言うことについて、連携し取り組む必要がある。
その他	（1）特筆すべき事項 特になし （2）今後の課題 ①　学科としての現在の課題は、入学者の確保と国試の合格率アップであり、すでに述べてきたがオープンキャンパス・桐和祭での対応について、入試、広報との関係を密にしながら行う予定であり具体的な成果が生まれる内容としたい。 ②　１年生に対して、学生への個別面談などを通して、できるだけ大学生活のスタートに躓かないような対応を行い、また、授業を工夫し、やる気をそがないようにし、退学者の減少につながるようにしていく。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	子ども学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①実習指導に関する授業の充実がみられた。特に日誌の形式を見直し、学生の実習がより効果的になるような工夫が行われた。また、実習園との連携をとることで、日誌の形式変更に対する理解を深めてもらうようにした。 ②授業では、知識の確実な固定化を図るために中間テストやミニレポートなどを実施して、学生の理解度を把握しながら授業を展開する教員が増えた。 ③グループワークやパワーポイントの工夫により、学生が積極的に授業に参加できる工夫をしている授業が多かった。 （2）今後の課題 ①大教室での授業で学習に集中しにくい状況があり、私語が目立つ授業がある。環境に左右されない授業方法の工夫が必要である。 ②実習指導に関して、平成29年度から担当教員が大きく変更となる。これまでの指導内容が継承されることはもちろんであるが、より充実した内容になるように新しい視点を含めて工夫をしていく必要がある。 ③公務員試験対策に一定の効果がみられるようになってきたが、さらに受験者及び合格者の増加を目指す必要がある。
研究	（1）特筆すべき事項 ①学内紀要への投稿は少なかったが、学会誌への投稿が昨年度より大幅に増加した。特に若い教員が積極的に研究を進めており、成果を論文にまとめる年度であったことが反映されたと思われる。 ②書籍の出版については、共著がほとんどであるが、昨年度より増加している。 ③学会発表の本数も増えており、積極的に研究に取り組むことができる状況になってきていることがうかがわれる。 （2）今後の課題 ①科研費の獲得数は決して多くはなく、また申請者も増えていない。今後、科研費に積極的に挑戦できるような環境作りをしていく必要がある。 ②学生の就職対策の教育に関する研究を学科として取り組む予定であり、特別研究費の獲得を目指したい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①挨拶運動は学科FDとしてこれまで通り実施してきた。学生が挨拶の声を出せるようになり、実習などにも効果がみられている。 ②アラートシステムに名前が上がってくる学生に関しては、担任が早めに声をかけたり面談を実施したりするなどの対応を心がけた。 ③単位習得などに問題のある学生や実習に課題があった学生などに関して、学科会議を通して全教員が周知するように努めた。また、実習会議の内容についても全教員が共有できるようにして、様々な方向から学生をサポートできる体制をとってきた。 （2）今後の課題 ①29年度は休学から復学する学生、過年次生、履修制限のかかる学生などが複数存在するため、個々に応じた丁寧なサポートが必要となる。中心的にかかわる教員を決めるとともに、学科教員全体で情報を共有しながら対応していきたい。 ②経済的に困難な学生、家庭に問題を抱える学生が増加傾向にある。退学という状況になってしまう前に、どのような支援ができるか対策を考え、学生本人の将来を見据えてサポートをしていけるようにすることが課題である。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①近隣の保育所や幼稚園との交流、ボランティア活動に関しては昨年度に引き続き実施してきた。ボランティアの要望も増加傾向にあり、近隣からの子ども学科に対する期待に応えることができるようにしていきたい。 ②新宿区との包括連携事業として、神楽坂の老人施設でのワークショップについて、昨年度より開催回数が増え、学生の学びにもつながっていた。 ③大宮アルディージャの試合中の保育ボランティアも昨年度に引き続き実施してきた。これについても、評価が高く、今後も期待されている。 （2）今後の課題 ①保育者養成校として地域の保育施設などと連携し、子育て支援や保育者の研修などにおいて貢献ができるような活動を学科として計画していく必要があると考えている。 ②各教員の研究を基盤とした社会貢献についてはあまり盛んではないことから、研究に関連した貢献に関しても進めたいと考えている。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①学科長が変わり、全教員が年度初めは不安感があったように感じる。しかし、今年度については学科運営に関して、前学科長の方針を引き継ぐことで、学科運営に混乱をきたさないように配慮してきた。また、各委員も大きな変更を行わなかったため、組織として停滞することはなかったと考えている。 ②教務委員、入試広報委員、学生委員、キャリアセンター委員が、それぞれの業務に対して丁寧な取り組みを行っていた。特に入試広報委員に関しては、入試広報課と連携しながら新しい試みを積極的に提案し、本年度は1年生の母校への手紙を送付することができた。 ③本年度で退職をする教員が5名となり、29年度に向けて新しい教員を採用する必要が生じた。教授、無期雇用の教員を中心とした人事委員会により、29年度採用の新任を確保することができた。 （2）今後の課題 ①新任が5名入ることで、学科の状況が変わることが予想できる。新任者がやりがいを感じることができるよう、学科の方針を明確にし、安心して教育・研究に取り組める環境作りが課題である。
その他	（1）特筆すべき事項 ①毎年1月に開催していた実習園との検討会である「実習懇談会」を10月に開催し、桐和祭の見学をしていただいた。それにより、実習園に子ども学科のカリキュラムの特徴を具体的に理解してもらうことができた。また、懇談会での意見交換では、今後の実習に有効な意見を多くいただくことができ、実習のあり方についてお互いに考える機会となった。 ②入試対策の新しい試みとして、1年生の母校に学生の様子を伝える手紙を担任が作成し、発送した。今年度はあまり時間をかけずに作成したが、今後より効果的な手紙の内容について検討し、受験者増につなげたい。 （2）今後の課題 ①新カリキュラムがスタートしたが、休学や履修制限のかかる学生がおり、29年度は新・旧のカリキュラムが同時並行で進行していくことになる。学生が混乱しないように、教務委員を中心に教員全体で学生の履修状況を把握していく必要がある。 ②公務員対策として、29年には2年次からの模擬テスト実施を計画しており、公務員試験に対する学生の意識を高めていく。 ③29年度はAO入試S日程を実施することになっている。入試方法、フォローアップセミナーのあり方など、初年度の状況を見ながら検討を続けたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	児童教育学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①教採試験では、小林昌美特任教授と石田好広教授の指導と学科教職員の協力により、教職希望学生34名（全員）が４月から小学校の教壇に立つことができた（教壇率100％の達成）。内訳は公立学校正規採用者19名・臨時採用講師15名で、採用者数・教壇率ともに過去最高であった。 ②中山博夫教授の指導の下、２年生の舟木頌子さんが文部科学省による海外留学制度「トビタテ！JAPAN日本留学プログラム」に応募して５期生に採用された。このプログラムに本学生から採用されたのは、舟木さんで２人目という快挙であった。 ③昨年に続き、中山博夫教授が児童教育学科学生を引率してマレーシアへのスタディツアーを実施し（３月）、多大の成果をあげた。 ④「教育実習Ⅱ」では、山本礼二教授・横田和子専任講師・枝元香菜子助教のもと、介護等体験の実習に備えて、日本障がい者リハビリテーション協会から講師を招いて障がい者スポーツを体験した。共生社会の構築を担う教師の育成に向けての取組みとして画期的取組みと言える。 （２）今後の課題 ①教員採用の激減期に備えて、教師養成塾や教員採用研修などの内容の見直しを図り、学生個々の特性に配慮したきめ細かな指導の一層の充実をはかる。 ②道徳と外国語活動の教科化に対応したカリキュラムの研究を進め、教育内容の高度化・現代化に対応した指導体制の構築を目指す。
研究	（１）特筆すべき事項 ①平成28年度の児童教育学科正規教職員（13名）の執筆論文21本（昨年度２本）、書籍３冊（同２冊）、学会発表11本（同８本）であり、総計35に達した。前年に比べて2.9倍の増加であり、新学部、新学科での課程認定審査に向けての業績作りの面で大きな成果を上げることができた。 ②佐藤仁美専任講師の作品「白景―天女―」が「徳島LEDアートフェスティバル」で入賞を果たし、同作品が徳島市内に展示された。 ③田尻信一教授が日本女子大学大学院に学位論文「探究的世界史学習論の研究」を提出して博士の学位を得た。また、同研究に対して日本女子大学から「成瀬仁蔵先生記念賞」が授与された。 ④藤谷哲准教授と横田和子専任講師は海外の学会でそれぞれ研究発表を行い、国際化に対応した高度な研究を進めた。 （２）今後の課題 ①新学部、新学科の立ち上げをスムーズに進めるためには、児童教育学科の各教員が専門分野の研究の一層の充実をはかることが求められる。そのため、学科として以下の取組みを強化する ・科研費、学内特別研究費、外部資金の獲得を奨励し、学科教員の研究に対する意識を高め、研究力量の一層の向上を目指す。 ・学科教員による共同研究を推進し、研究の高度化・現代化に対応した協働的な体制の構築に努める。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①雪吹誠准教授の指導の下でゼミ学生が中心となって1年全員、２・３・４年有志が参加して山手線40Kmウォークを実施したり（３回目）、小林恭子専任講師の指導の下でゼミ学生が高齢者福祉施設を訪問して演奏会を催したり、渡邉はるか専任講師の指導の下でゼミ学生がエコ活動を実施したりするなど、ゼミ活動の中に生徒の自主的活動や社会的活動を盛り込んだ学生指導が組織され多大な効果を上げた。 ②1年・2年の学生に対しては、クラス担任による個人面談を実施して学生理解に努めた。その結果、円滑な学生指導が可能になった。 ③大学祭の時に、児童教育学科主催の学科保護者会を設定し、保護者と教員の懇談を行った。その結果、学生指導の方針を保護者に理解いただくことができ、円滑な学生指導が可能になった。 ④月2回の定例学科会議では、学生に関する情報交換の時間を設定して学科教員の学生に対する理解と共通認識を図った。その結果、教員がすべての学科学生に対して指導できる体制を整えることができ、退学者や単位を落とす学生を減少させることに繋がった。 （２）今後の課題 ①近年、学生の多様化や貧困化が指摘される。きめ細かな学生指導を進めるためには、学生の現状に対する分析と対策を検討する必要がある。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①平成28年度の児童教育学科教職員の社会貢献関連項目数は41に達し、昨年度の17に比べて2.4倍の増加であった。各教職員の積極的な社会貢献が目立った1年であったと言える。 ②社会貢献の内容としては、学会・協会役員等（12項目）、国・地方公共団体等委員（10項目）などでの貢献が顕著であり、個々の教員の専門研究を通じての社会貢献をはたしていたことが裏付けられた。 ③多くの教員がトビタテ留学、グローバル教育コンクール、高校生の留学促進事業など文科省の留学支援の委員を務めており、国の国際化推進の施策に多大の貢献を果たした。 （２）今後の課題 ①各教職員の社会貢献活動を、本学の教育や学生指導に生かしていくことが期待される。 ②今後は、各教職員の社会貢献を大学ホームページなどを通じて広く広報し、目白大学の社会貢献として喧伝していくことを推進することが期待される。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①月2回の学科会議を定例化し、学科分掌・委員会、学生指導、学科行事についての協議と報告を通じて、情報共有と協働体制を確立することができ、迅速で効率的な学科運営を達成できた。このことが学生の教採合格率の向上や退学者の防止、学科行事の充実化などに結びついた。 ②年度初めの学科会議で、学科長の学科運営の基本方針と各担当者からの年間努力目標と計画の提案を行い、年度途中での見直し、年度末の総括を経ることで、PDCAサイクルに基づく発展的な学科運営を進めることができた。 ③５月に学科正教員と非常勤講師との連絡会を実施し、学科から非常勤講師への教務関係や学生指導に関する説明を行うとともに、教員間の懇親を深めた。その結果、学科方針への非常勤教師の理解と協力を得ることができた。 ④若手教員が学科会議と研修会の企画と運営に積極的に関わる体制をとることで、若手教員の士気が高まり、組織の活性化を達成できた。 ⑤教職員の学科懇親会を７月（納涼会）、12月（忘年会）、3月（納め会）に実施した。その結果、教職員間の親睦を深めることができた。 （２）今後の課題 ①学科教員が高い同僚意識を保持し、協働して学科運営を推進していく体制のなお一層の充実をはかる。
その他	（１）特筆すべき事項 ①平成28年度は新カリキュラム移行後２年目であったため、3月に学科研修会を開いてカリキュラムの中間評価を行った。各学年の必修、選択科目の見直しを行うことができ、新学部・新学科のカリキュラム編成にむけての基礎資料にすることができた。 ②中野区教育員会との連携での小学校観察実習を推進し、学生の教職への高いモティベーションを保持できた。 ③学科講演会（7月）・年度末集会（1月）では、学外講師による講演会を実施して、童話作家・赤羽末吉の生涯や料理研究家の枝元なほみ氏による食と健康についての講演を行い、学問や社会に対する学生の知的興味や関心の喚起と高揚に努めることができた。 （２）今後の課題 ①キャリア担当教員を中心に教職を希望しない学生に対する就職指導の体制作りの検討を行い、きめ細かなキャリア教育を推進する。 ②教務担当教員を中心に、新学部・新学科の向けてのカリキュラム構想案の検討に着手する。 ③新学部・新学科の課程認定の審査に向けて、教員各自が自己の研究業績のブラッシュアップを図る。 ④来年度は、児童教育学科創設10周年を迎える。そのため、学科内に委員会を組織し、創設10周年記念行事の準備に着手する。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	社会学部

（１）特筆すべき事項

＜教育＞

○社会学部DLP学科間連携プログラムとして「環境学」「メディア文化」「観光とまちづくり」「ファッション文化」の４分野を立ち上げた。履修手続き等の検討をおこない、ベーシックセミナーで告知、説明会を開催するなど募集をおこなったが、開設初年度の応募者は６名にとどまった。

○平成30年度以降開設される総合科目（オムニバス形式）として、社会学部から「社会生活のデザイン」「子供とメディア」「「観光」で読み解く現代社会」「人文系学生のための情報ネットワーク・データ活用入門」「マスメディア学入門」「江戸から東京へ」「サステイナブル社会を考える」の７科目を立ち上げた。

○アクティブラーニングの取組支援の一環として、社会学部「アッハ！体験」プロジェクトの募集をおこない、81名の学生による11件のプロジェクトを採択した。それを受けて社会学部「アッハ！体験」プロジェクト成果発表会を開催した。

○この３年間に社会学部３学科でおこなわれた「アウトスクール型学習」と「アクティブラーニング」の取り組みについてアンケート調査による情報収集をおこなった。

○商品開発、テレビ番組制作、フリーペーパー制作、イベント企画、インターンシップなど、様々なアプローチで、地域、自治体、企業、NPOなどとの連携（地域連携・産学連携）に取り組んだ。

○社会情報学科では企業等24名の講師を招いて企業の実践的マーケティングを学ぶ授業を展開、メディア表現学科では臨地研修（インターンシップ研修）成果報告会を実施、地域社会学科ではゼミとフィールドワークを連動させた現場教育を実践するなど、各学科ともにユニークな教育方針のもと学生の興味や関心を引き出す授業が実践された。

○卒業研究は３学科ともに必修であり、執筆要領の配布や研究計画の提出など、学生の動機を高めるための工夫がなされた。とくに社会情報学科では中間審査会や最終審査会を開催、メディア表現学科では卒業研究審査会や卒業研究優秀者発表会を開催するなど、卒業研究の厳格な審査と質的向上に努めた。

＜研究＞

○社会学部主催パネルトーク「映像コンテンツの現在と今後」（映画『無伴奏』の監督並びにプロデューサーを迎えて公開講演会）を開催した。またこれと連動して目白大学新宿図書館にて映画『無伴奏』の関連コンテンツ及び原作者である小池真理子氏の作品展を開催した。本プロジェクトはメディア表現学科が主体となって企画し、社会学部全体を巻き込んだ形で相乗効果を生んだ。

○メディア表現学科三上ゼミが中心となって『目白大学新聞』第41号、第42号を発行し、目白大学の学生・教員・卒業生の活躍、大学のイベント、大学周辺の身近な話題を取り上げ、大学を巻き込んだ形で効果的に情報発信をおこなった。

○学内外の社会連携・産学共同イベント等の周知と具体的な成果について大学基幹サイト等を通じて継続的に情報発信・提供をおこなった。

○社会学部教員の研究情報共有に向けて教員ネットサービスにある教員研究データベースの更新を依頼し、それをもとに学部教員の研究活動と社会活動を整理し、学部教員の研究交流や共同研究を促進するためのマッチングを検討する準備作業をおこなった。

○論文・出版物の件数は、学部全体で均すと教員一人当たり1～2編に相当し、積極的に研究活動に取り組んでいる。

＜学生指導＞

○３学科ともに、問題学生の早期発見と留年・退学を減らす対策として、学科会議などで問題学生（出席不良・成績不振）に関する情報共有、学生本人との面談はもちろん、成績表の保護者宛て送付、保護者会の開催、保護者との面談など、学科長を中心にクラス・ゼミ担任と学生本人や保護者との連絡を密にした。

○３学科ともに、入学前教育としてのフォローアップセミナーと初年次教育としてのベーシックセミナーを学科の特徴を活かす形で開講し、大学生としての自覚を促した。

○３学科ともに、就職率は91％～98％、とくに社会情報学科では就活相談会の開催や求人リストの配布などが奏功したと見られ98.9％と学内トップクラスを達成した。

○３学科ともに、資格取得のための指導に力を入れ、教員免許、学芸員資格、社会調査士、全国大学実務教育協会認定資格などで実績を上げた。日本語検定、日本漢字能力検定、日商簿記検定、リテールマーケティング検定、MOSなど、様々な資格検定に挑戦し、平成28年度の資格取得奨励金申請者は34名に及んだ。

＜社会貢献＞

○３学科ともに、学会・協会の役員や公共団体等委員を担う教員が多数おり、指導的な立場での社会貢献がなされた。

○３学科ともに、地域連携や産学連携を伴う社会貢献事業に積極的に取り組み、とくに社会情報学科では気仙沼市での防潮林再生事業、メディア表現学科ではトキワ荘通り協働プロジェクトやフリーペーパー発行、地域社会学科では「染の小道」や「遺跡フェスタ」、戸田市市民大学講座など、数多くの成果を上げた。

＜組織マネジメント＞

○社会学部改組の検討が俄かに本格化し、社会情報学科と地域社会学科では新学科の構想が、メディア表現学科では新学部・新学科の開設準備が焦眉の課題となった。その後、社会情報学科と地域社会学科はスケジュール調整に入ったが、メディア表現学科は発展的に改組独立し、平成30年度より、メディア学部メディア学科を新設することになった。

○中期計画WG（教育、資格、社会貢献）、懇談会担当（講演会、交流会）等の役割分担の明確化により、事務負担の平準化とプロジェクト推進の効率化を図った。

○社会学部交流会を開催し、非常勤講師との、あるいは専任教員相互の情報交換をおこない、学生や教育をめぐる有意義な情報共有の場を設けることができた。

○毎月、社会学部教授会の前週に社会学部運営委員会を開催し、学科間の情報共有を図るとともに、学部内事務の効率化を促進した。

○平成29年度入試において、社会情報学科とメディア表現学科は入学定員を大きく上回ることが予測されたため、社会学部定員管理の厳格化とメディア学部新設の手続きを鑑みて、初めて社会学部全体の定員管理と地域社会学科の定員割れリスクを背負うという難しい動向分析と入試判定を迫られたが、結果として開設以来唯一定員割れのない学部となった。

○社会情報学科で４名、メディア表現学科で２名、補充人事がおこなわれた。地域社会学科では次年度に課題として持ち越された。

（２）今後の課題

○教育面では、アクティブラーニングの推進、専門的知識の習得、社会人基礎力の向上、新カリキュラムへの移行準備などが課題である。

○研究面では、学生指導や学内業務に時間を割かれながらも、更なる論文作成や学会発表、科研費申請、産学連携などが要請されている。

○学生指導面では、中退予防対策、ベーシックセミナーなど初年次教育の充実、キャリアデザインなど就職活動支援の強化が期待される。

○社会貢献面では、すでに多くの実績を残しているが、更に学科を越え専門を越えた共同事業や連携事業ができないか検討の余地がある。

○組織マネジメント面では、学部の改組（社会情報学科と地域社会学科の再編）、学科間の連携強化、学生募集と定員管理など課題が多い。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	社会情報学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①旧カリキュラム充当学生は4年次となり、次年度は新カリキュラムへ全面的移行となるため、卒業要件等の指導を強化した。 ②新カリキュラム充当学生が3年次となり、専門系列（ユニット）の選択申告による学習意識を高める指導強化の方策を本年度も継続実施した。 ③卒業研究の質的向上を図るべく、中間審査会・最終審査会、論文提出等について合否判定・再試験等を厳格に実施した。 ④ベーシックセミナー4年目を迎え、大学全体の方針に即しつつ、学年全体や個別クラス指導等を円滑かつ計画的に運営できた。 ⑤実学を実務者（企業人）から学ぶ機会としての「現代の社会1（ファッションブランド戦略論）」「フードブランド戦略論」は、企業等24社（24名）の講師を招き、企業等の実践的マーケティングを学ぶ機会を展開した。 ⑥フォローアップセミナーを開催し、大学での学び、新聞読解を指導し、一般入試過去問の解答と新聞記事要約を他日提出させ、評価した。 （2）今後の課題 ①3年経過した新カリキュラムの円滑な運用と教育効果の検証を図り、完成年度を迎える次年度には学士力向上に資する見直し等の必要性を検討する。 ②AP・CP・DPと最終カリキュラムの整合性を検証し、就活などの具体的成果と社会的評価を受ける教育成果の創出を継続検討する。
研究	（1）特筆すべき事項 ①海外の学会参加と海外の研究論文を2件発表した教員がいた。 ②科研費の給付を受けた教員は、新規採択1件であった。 ③学科の研究及び教育書籍「ソシオ情報シリーズ」第16号『社会デザインと教養』を刊行し、10名の学科教員が寄稿した。 （2）今後の課題 ①教員にとっての十分な研究活動（学会参加・論文作成）の実現を期したい。 ②対外的研究資金の更なる獲得を目指し、研究活動の充実を期したい。 ③海外の学会活動等で精力的に研究に励む教員もいるが、全体的に教育活動・学生指導に時間が割かれる現状がある。効率的な学科運営を図り、教員の研究活動に従事する時間の確保を目指したい。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①学科会議、ML活用等で、特に注視する学生の学科内情報共有により適切な指導ができた。 ②成績・出席不良学生には、学期末にクラス・ゼミ担任のコメントつき成績表を保護者宛に送付した。加えて特に必要な場合は学期末以外でも送付した。 ③3年次生は秋学期後半より、4年次生は1年間を通じて社情就活相談会を週1回実施し、就活相談の実施や「求人リスト」等資料を週1回発行した。 ④最終の内定率 100%で好調であった。キャリアセンター活用を学生に勧め、保護者向け就活相談会を開催、ゼミ担当者が保護者面談を行った。 ⑤2年次生は春学期中途でクラス担任の面談を実施し、個別指導が手薄となる2年次学生の指導強化と不安等の解消に資した。 （2）今後の課題 ①1年次生はベーシックセミナー時・2年次生は担任が個別面談をしたが、さらに可能な限り個別面談等の機会を創出し、学生の把握と指導を徹底したい。これらを中途退学者の削減に結びつける策の一つとして重視する。 ②TOP UP教育の可能性を検討し、人材育成の更なる向上を目指す。 ③最終内定率は過去最高の100%を達成できたが、次年度もこれを目指して就活指導を強化したい。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①公的な団体等の講演会等で講演者として参画する教員が散見された。 ②気仙沼市を中心に東日本大震災復興へのボランティア活動として、防潮林である照葉樹林の苗木の育成を新宿で、苗木の植林を現地で昨年度に続き展開した。また担当教員のコーディネートの元に、興味関心を深める学科学生が増加してきた。 ②学会役員等を引き受け、社会貢献事業に携わる教員が見受けられた。 （2）今後の課題 ①ソーシャルデザインユニット等の学びに直結したボランティア活動への参画等、学生を巻き込んだ社会貢献の場を増やしていきたい。 ②社会に提言していく場として、社会学部他学科との連携の下に社会貢献活動の発展を継続検討したい。 ③学生の教育効果とも連動した、社会的な学習成果を社会貢献する視点から検討したい。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①学科FD研修会は3回ともほぼ全員が参加した。 ②学科内の共通課題認識、課題定期を得るために、「ソシオシリーズ」刊行を継続できた。 ③オープンキャンパスのための学科PR内容を刷新した。社会心理実験による受験生参加型のPR展開等を継続できた。 ④新カリキュラム検討チームを学科内に発足し、H29年度からの新たなカリキュラム検討に着手したが、4月時点で教学上層部からの承認を得たものの、学部・学科改組の動向により、改組の機会に具体的展開は統合展開することとなった。 ⑤新任者4名の採用活動は計画通り遂行され、有望な若手教員を採用するに至った。 （2）今後の課題 ①FD研修については、学科内の取り組みを活性化させることを目指したい。 ②教授会等、学部中心の大学運営の改革に連動した学科の組織運営を心がけ、学部・全学の活動にも寄与することを継続する。 ③全学的な改組動向の方向性を鑑みて、学科組織の改革はそれらと並行して鋭意検討することとしたい。
その他	（1）特筆すべき事項 ①平成28年度入試において、入学手続者が138名と前年度に並び好調であった。 ②昨年度、1名の教員が自己都合退職をし後任人事が見送られたが、上記項目のとおり、無事に採用するに至った。 （2）今後の課題 ①平成30年度入試に向けて入学定員確保を目指し、特にオープンキャンパス等の学科広報に全力を注ぎたい。また定員管理の厳格化は学部他学科との連動の下に学部としての入学試験のあり方を十分に配慮したい。 ②学科の全般的な活動において、大学全体の方針や運営に則しつつ、効率化・適正化を検証し、機動的且つ柔軟な学科運営を目指したい。 ③平成29年度は2名の退職者が予定しているが、補充をしない特任教授以外の1名につき、適正な学科構成員の確保を目指したい。 ④学科の全般的な運営について、より透明性が高く全構成員が課題を共有し共働できる体制を促進・継続したい。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	メディア表現学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ・『目白大学新聞』が「日本タウン誌　フリーペーパー大賞　2016」のタブロイド部門で優秀賞を受賞。 ・さいたま市選挙管理委員会、さいたま市国民健康保険課と連携し、「若者向け選挙啓発動画」「特定健康診査受診を向上させるための動画」を共同制作。 （2）今後の課題 ・『目白大学新聞』が優秀賞を受賞したが、「最優秀賞」は逃している。今後、タブロイド部門で５紙の優秀賞の中から「最優秀賞」を受賞できるよう努力したい。
研究	（1）特筆すべき事項 メディア表現学科の先生の専門は、美術から漫画から地方メディアからミャンマーのメディア情勢までと非常に幅広い。海外の学会に参加・発表し、論文・記事などを発表し、活発に活動している。 （2）今後の課題 科研費を得ている研究者はいるにはいるが、その数を今後を増やしていきたい。とはいえ、それは必ずしも容易ではないだろう。
学生指導	（1）特筆すべき事項 来年度から新「メディア学部」を創設するので、在校生にその進展を告知してきた。 （2）今後の課題 新学部設立が、在校生に不利益にならないように注意していきたい。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 としま南長崎トキワ荘協働プロジェクト協議会との包括連携を通して、地域活性化に貢献している。また、現在「トキワ荘盛り上げ隊」も組織し、活性化に尽力している。 （2）今後の課題 担当の先生の負担が大きく、研究・教育に加えて、社会貢献まで実施していくのは容易ではない。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 新学部設立のために、「学部の設置の趣旨等」を書くためにWGを組織し、会議や執筆のために長時間を費やした。 （2）今後の課題 現在、文部科学省に新学部設立のための書類を提出し、その結果を持っているところ。その結果によっては再度の書き直しが必要となり、「認可」まではまだ時間を要する模様。
その他	（1）特筆すべき事項 特記事項なし （2）今後の課題 特記事項なし

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	地域社会学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ・学科専任教員、及び非常勤教員は真摯に授業に取り組み、充実した教育効果を上げていると評価する。 ・特に、３・４年次のゼミ授業では本学のめざす教員と学生の距離の近い教育を実現している。 ・就職率９８パーセントは教育効果の表れとして評価できる。 （２）今後の課題 ・各教員の授業方法に差異があるようなのでＦＤ関係の充実が必要。 ・カリキュラム上の各科目の連関についての検討が必要。
研究	（１）特筆すべき事項 ・個々の教員の研究業績は、論文・図書合わせて１５件、学会発表等１１件と、１２名の人員としては通常であろう。 （２）今後の課題 ・学科としての共同研究はできないものか。 ・外部研究資金の獲得が低調である点は改善の余地がある。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ・ゼミ授業を中心とした教員と学生の距離が近い点を活かしたきめ細かい指導が行われていると評価できる。 （２）今後の課題 ・中途退学、及び留年対策は改善されてはいるが、更なる努力が必要。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ・個々の教員がそれぞれの立場で様々な社会貢献に取り組んでおり高く評価できる。 ・特に、「染の小道」、「遺跡フェスタ」を通じての大学周辺地域との連携は注目される活動である。 （２）今後の課題 ・学科としての取り組みの充実が必要。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ・日常的な学科運営には問題は無い。 （２）今後の課題 ・学科構成員同士のコミュニケーション不足の解消が急務。
その他	（１）特筆すべき事項 ・２８年度末における専任教員採用人事の不調、及び入試状況の変化に対する不満等により学科内の信頼関係が損なわれている。 （２）今後の課題 ・今後の改組、人事の動きを見極めながら改善する必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	経営学部

(1)特筆すべき事項
新規に会計学分野で能力の高い専任講師を採用することができたため、会計学の教育が軌道に乗ることとなった。

(2)今後の課題
カリキュラム改定を行い、経営学部／学科としての有るべき教育を構築するとともに、それに伴う人事を行う。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	経営学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ・２８年度から行った会計科目の能力別クラスの効果もあり、多くの日商簿記検定の合格者（２級３名、３級１９名）を出した。 （２）今後の課題 ・引き続き、簿記検定合格者の人数を増やす努力を継続するとともに、簿記以外の分野においても勉学に対するモチベーション向上が重要である。 ・分野毎の科目配分にやや偏りがあり、また学生のモチベーション向上を目指して、３０年度に向けたカリキュラムの改訂が望まれる。
研究	（１）特筆すべき事項 ・科研費をはじめとする外部資金を獲得した教員、応募する教員数は増加しつつある。 （２）今後の課題 ・各教員が外部資金の獲得を目指すとともに、論文発表や書籍刊行の努力を継続することが望まれる。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ・昨年度までと比較して退学する学生の数が大きく減少した。 （２）今後の課題 ・自分のキャリア形成について深く考えさせ、勉学意欲を高めることにより、退学をさらに減らすことが可能であると考える。教員の配置を含めて考えたい。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 様々な社会貢献の実績が増えて来た。 （２）今後の課題 地域との連携を深めるとともに、学生募集に貢献できるようなメッセージとなるように考えたい。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ・２８年度より３名の新任教員を迎えた。学科の課題であった経営学プロパーの教員も含まれている。 ・今年度の採用活動に２９年度から会計分野の教員を１名、迎えることができた。 （２）今後の課題 ・教育内容を向上させるために、教員（キャリア、会計、経営管理）の増員が必要である。
その他	（１）特筆すべき事項 ・２８年度より入学定員を１０名増やし１３０名としたが、各大学で入学定員管理が厳しくなった影響もあってか、中期・後期入試で合格者を出せない状況となった。 （２）今後の課題 ・近年、学生のレベルは徐々に上がっている。学生数を増やすことは学生同士のネットワーク拡大につながり、望ましいことであるが、学生のレベルが向上している昨今の趨勢を損なわない範囲で慎重に行いたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	外国語学部

(1) 特筆すべき事項

【教育】

特筆すべき活動事例として、①海外の協定校を2校増やしたこと（ニュージーランドのオークランド工科大学（英米語学科）、韓国外国語大学校の龍仁キャンパス（韓国語学科））、②日本語・日本語教育学科における日本語教育実習先の開拓（現在海外の5つの教育機関（韓国協定校3校、オーストラリア協定校など2校）との交渉を進めている）、③社会の第一線で活躍しているさまざまな分野の社会人を講師に迎えて行う特別講座「グローバルナリッジシリーズ」を、昨年に引き続き4学科合同で企画・実施したこと、④英米語学科のアメリカ文学分野において初めて「マークトウェインを通してみる日米文化」と題するシンポジウムを開催し、好評を博したこと、⑤第4回城西大学中国語スピーチコンテスト（2016年10月22日、於・城西大学）に中国語学科の2年次生3名が出場し、そのうち1名が埼玉県日本中国友好協会賞を、2名が城西大学同窓会長賞を受賞したこと、⑥韓国語学科において、韓国語学科体育祭と韓国語学科映画祭を実施、また韓国語学科後援会とも連携しながら、春と秋の2回、保護者対象の留学説明会を実施したこと、などが挙げられる。

【研究】

特筆すべき活動事例として、①日本語・日本語教育学科の専任教員が開催校の責任者となって、公益社団法人日本語教育学会の年次大会を目白大学で開催し、過去最大規模の1,259人の参加者を得て、成功裏に学会を終えることができたこと、②中国語学科の教員が科学研究費補助金（基盤研究C）に採択されたこと、③日本語・日本語教育学科の教員が科研費の研究成果の一部を研究叢書として2017年3月に刊行したこと、④英米語学科の教員で、一流の国際誌に学術論文を掲載した者がいること、⑤海外での研究発表の件数が多かったこと（特に日本語・日本語教育学科で9件、英米語学科で7件）、などが挙げられる。

【学生指導】

特筆すべき活動事例として、①中国語学科において、日頃の地道な学生指導が功を奏し、卒業生の就職内定率が100％に達したこと、②韓国語学科において、韓国財団の支援によるインターンシップ生を初めて受け入れたこと、③中国語学科において、平成28年度「SPISチャレンジ」に黄教授指導のゼミ生が応募し採択されたこと、などが挙げられる。

【社会貢献】

特筆すべき活動事例として、①英米語学科の教員でNHKラジオ「入門ビジネス英語」の講師を務めた者がいること（平成29年度も継続中）、②英米語学科において、アメリカ文学分野のシンポジウムを開催し、成功を収めたこと、③韓国語学科の教員で「韓国文化院」における韓国語教員対象の韓国語教育に関する講演会の講師を務めた者がいること、④中国語学科の教員で、公益法人松下幸之助記念財団主催の「第12回松下幸之助国際スカラシップフォーラム」（2016年10月23日、於・東京大学）の実行委員を務めた者がいること、⑤中国語学科の教員でNPO「中国山地の人々と交流する会」の諸活動に参加した者がいること、⑥韓国語学科が韓国語学科映画祭を実施、また桐和祭で韓国文化の展示や韓国料理の販売を行ったこと、などが挙げられる。

【組織マネジメント】

特筆すべき活動事例として、①中国語学科の入試において、学科長を中心とする日頃の地道な組織的活動が功を奏し、昨年度より受験者が増え、結果として久しぶりに定員が充足できたこと、②英米語学科において、学科独自の内規（「英米語学科教員会議の運営に関する内規」）に基づいて透明で民主的な学科運営が行われていること、などが挙げられる。

【その他】

特筆すべき他の活動事例として、韓国語学科の教員で歴史小説を出版した者がいること、などが挙げられる。

(2) 今後の課題

【教育】

①外国語学部及び4学科の専門教育を通して達成すべき学修成果（「専門基礎力」）の具体的な内容を明らかにし、これを達成するための新専門教育カリキュラムを策定する。②外国語学部留学推進策検討委員会を中心に、事前教育と事後教育、及びリスク・マネジメント体制の再構築を含め、留学を実のあるものとするための方策を講じる。同時に、留学関連の科目群のカリキュラム内での位置付けを明確にする。

【研究】

各学科の研究活動の活性化を図るためにも、特に科研費の応募数及び採択数を増やす努力をしていく必要がある。

【学生指導】

韓国語学科の、教育専担教員や異分野の教員を除いた、実稼働教員一人当たりの担当学生数は、40人で、他の学科と比較するとかなり過重負担を強いられていると言える（他学科の実稼働教員一人当たりの学生数は、英米語学科が24人、中国語学科が（副学長1名を除くと）32人、日本語・日本語教育学科が23人となっている）。このアンバランスを何とか解消しなければならない。

【社会貢献】

研究活動が全般的に今一つ精彩を欠いているので止むを得ないことではあるが、研究成果の社会への還元という面で課題を残す結果となっている。

【組織マネジメント】

①人事の責任体制を明確化し、透明で公正な人事が行われるようなさらなる仕掛けを工夫する必要がある。②中国語学科が6年ぶりに定員を充足することができたわけであるが、この現状を今後維持するだけでなく、さらなる改善をもたらすべく、中国語学科が努力するのは当然のことであるが、外国語学部としても全力で中国語学科を支援していく必要がある。③定員未充足の日本語・日本語教育学科に対しても、学部として支援していく必要がある。

【その他】

諸般の事情で海外留学ができなくなった学生に対して、英米語学科ではPower English 2の代替科目を指定して対処しているが、韓国語学科においても今後、これらの学生に対して何らかの代替措置を講じる必要がある。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	英米語学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①1学期間のセメスター留学（Power English）の対象校をさらに増やすべく、ニュージーランドのオークランド工科大学を加え、3年間で2倍以上となった（平成25年度：3カ国4校→平成28年度末現在：7カ国9校）。 ②平成27年度に外国語学部として立ち上げた「グローバルナレッジシリーズ」に現役社会人のゲストスピーカーを招聘し、学生に実社会を知る機会を提供した　（平成28年度英米語学科開催実績7回、シリーズ累計22回）。 ③アメリカ文学として初めてのシンポジウム「マークトウェインを通してみる日米文化」を主催した。 （２）今後の課題 ①学位授与の方針（育成すべき人材像、獲得すべき知識・能力等の付加価値、達成すべき教育目標など）を明確化したうえで、専門科目カリキュラムの見直しを行う予定。 ②セメスター留学（Power English）の位置づけについても再考予定。
研究	（１）特筆すべき事項 ①国際学会誌への論文掲載が1件、及び国際学会での研究発表も7件あった。 （２）今後の課題 研究全般について、教員が力を入れる必要がある。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①クラス担任制度、ベーシックセミナー、ゼミ指導、コア・プログラム等を通じてきめ細かい指導を実施している。 ②就活については、ゼミの枠を超えて指導を行い、上場会社への内定に結びついた他、下級生が就職体験談を聞く機会を設けた。 （２）今後の課題 ①学科長、クラス担任教員、ベーシックセミナー担当教員、ゼミ指導教員等の緊密な連携による組織的な指導体制を確立する必要がある。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 平成27年度よりNHKラジオ「入門ビジネス英語」講師を務めている教員がいる（平成29年度も継続中）。 アメリカ文学に関わるシンポジウムを主催した。 アイルランド史の分野で、講演を行った教員がいる。 （２）今後の課題 引き続き英語および英語圏の文化・社会の分野につき、社会に貢献することを検討したい。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①「英米語学科教員会議の運営に関する内規」を独自に作成し、これに基づいて透明かつ民主的な運営を心がけるようにしている。 （２）今後の課題 ①透明で公正な人事を行うことを通して、引き続き学科教員組織のさらなる質の向上を図っていきたい。
その他	（１）特筆すべき事項 ①入試広報活動の一環として、グローバルナレッジシリーズ、シンポジウムにこれまで以上に力を入れたことは、入試にも一定の効果があったと考えている。 （２）今後の課題 ①平成31年度を見据えた専門科目の見直しにおいては、学生側の要望や実態に適切に配慮したカリキュラムを作成するよう努力する必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	中国語学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①社会の第一線で活躍する方々を講師に迎えておこなう特別講座「グローバルナレッジシリーズ」を、昨年に引き続き４学科合同で企画・実施した。 ②第４回城西大学中国語スピーチコンテスト（2016年10月22日、於・城西大学）に本学科２年生３名が出場し、そのうち１名が埼玉県日本中国友好協会賞、２名が城西大学同窓会長賞を受賞した。 ③「ベーシックセミナー」および「キャリアデザインＡ・Ｂ」の授業において、日本語・日本語教育学科との合同授業を実施した。 （２）今後の課題 ①中国語検定試験および通訳案内士試験の受検率と合格率向上のための指導を強化する必要がある。 ②卒業研究（卒業論文または卒業制作）の質的向上のための指導を充実させる必要がある。
研究	（１）特筆すべき事項 ①学科教員の研究論文掲載は２件、書籍出版（共著・『中日辞典』第3版、小学館、2016年11月）は１件であった。 ②学科教員１名が科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）を申請し、採択された。（「国際バカロレアの公立学校への導入における枠組み形成－日中の比較から」の研究代表者・2016年度～2018年度　(H.28～H.30)　配分総額 4,550,000 円） ③学科教員１名が提携校の康寧大学（台湾・台南）で学術交流を目的とした基調講演をおこなった。 ④日本植民地研究会春季研究会（2017年3月11日、於・専修大学）において、学科教員１名がコメンテーターを担当した。 （２）今後の課題 ①個々の学科教員がより一層積極的に研究活動に取組み、論文執筆や著書出版、学会発表などで研究成果を公表する必要がある。 ②所属学科や専門領域の枠を越え、学際的かつ横断的な共同研究事業をめざす必要がある。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①卒業生の就職内定率は94％と高率だった。 ②平成28年度「SPISチャレンジ」に黄丹青教授が指導するゼミ生が応募し採択された。（テーマ「中国人観光客の満足度と新たな要望に関する調査」） ③学生主体によって制作される学科新聞「熊猫通信」を、春・秋学期に１回ずつ発行した。 （２）今後の課題 ①好調な就職内定率を維持するためにも、きめ細やかな個別進路指導を継続する必要がある。 ②学科学生の帰属意識向上のためにも、桐和祭などの学内行事に学科単位で積極的に参加する必要がある。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①学科教員１名が、公益法人松下幸之助記念財団主催の「第12回松下幸之助国際スカラシップフォーラム」（2016年10月23日、於・東京大学）実行委員として、フォーラム登壇者の選考やフォーラム全体の運営に携わった。また、当日同時開催されたパネルディスカッション「留学後の出版とキャリア」において、同教員１名が司会を担当した。 ②学科教員１名が、松下幸之助記念財団が後援する出版事業（「ブックレット＜アジアを学ぼう＞シリーズ」風響社）において、若手執筆者への助言など継続的な育成支援をおこなった。 ③学科教員１名が、NPO「中国山地の人々と交流する会」の諸活動に参加した。 （２）今後の課題 ①自身の研究成果や研究者としてのキャリアを、より積極的に社会に還元しようとする姿勢が、学科教員各人に求められる。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①学科教員間の連携がスムーズにおこなわれており、教育活動面における諸情報を迅速かつ正確に共有できる体制を維持している。 ②人事面では、教授昇任案件や定年退職者の後任人事が、民主的かつ透明性の高い手続きを経て実施された。 ③今年度の入試では受験者が昨年より増加し、新年度入学者は定員を充足した。 （２）今後の課題 ①新年度入学者が６年ぶりに定員を充足したので、この状態を今年度以降も維持すべく、学科教員全員が諸対策に取り組む必要がある。
その他	（１）特筆すべき事項 特になし。 （２）今後の課題 特になし。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	韓国語学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①きめ細かい学生教育を実施している。ア．「韓国語学科体育祭」を実施し、学年を超えた学科学生全体の融和を図った。イ．「韓国語学科映画祭」を実施し、地域(新大久保)・社会(映画監督・俳優を招待)と連携した韓国語教育を推進した。ウ．1年次生全体で「桐和祭」に参加した。また、各ゼミで「桐和祭」に参加した。エ．学科学生と交換留学による留学生とを融和させるよう「ＳＩＮＮＡＲＡ」の活動を活性化させた。 ②留学教育を充実させた。ア．韓国外国語大学校の龍仁キャンパスと新たに提携した。イ．夏・冬の2回、教員による留学先協定校視察を実施した。ウ．学部全体と連携しながら「留学推進策検討委員会」において、推進策を検討した。エ．協定校を訪問して、交換留学、Ｄ.Ｄ.制度、Ｊ.Ｄ.制度の在り方を検討した。オ．韓国語学科後援会と連携しながら、春・秋の2回、保護者説明会を実施した。カ．「韓国語学科歓迎会」「韓国語学科留学歓送会」を実施した。今年度は副学長、学部長の参加もいただいた。⑦「臨地研修」の内規を改定した。 ③卒業研究の充実を図った。ア．卒業研究中間発表会を「学科全体」で実施した。イ．卒業研究発表会を全ゼミが「ゼミごと」に実施した。 （２）今後の課題 ①学年全体担任を無くしたことによるＢＳ担任の業務負担、ＳＩＮＮＡＲＡの活動内容、各委員の業務が増加した。　②業務負担による、助手業務の増加が課題として認識された。　③卒業研究における「論文」の位置づけを検討する必要が認識された。
研究	（１）特筆すべき事項 ①各教員が著書・論文を鋭意、発表している(5名が発表し、3名は作成しつつ発表できなかった)。 ②各教員が学会等で研究発表をしている(3名が発表した)。 ③各教員がテキスト、副教材を開発している(全員)。 （２）今後の課題 ①科研費への応募をさらに進める。 ②研究時間の確保、学会活動の時間確保に課題を感じる構成員が多い。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①韓国語基礎科目の能力別クラスの教育の連携を図った。 ②「ベーシック・セミナー」「韓国事情」の教育内容の充実を図った。 ③留学教育の充実を図った。 ④卒業研究活動の充実を期した。 ⑤インターンシップ生(今年度初受入)、SA、TAの専門科目教育における学生指導との連携を模索した。 ⑥SINNARAの活動を支えた。 （２）今後の課題 ①韓国語学科教員の担当授業時間数が多い(半期6コマ担当を基準としながら、全員が半期8コマ以上を抱える)。 ②専門科目担当教員の1教員当たりの担当学生数が50名近い。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①「韓国文化院」における韓国語教員対象の「韓国語教育」に関する講演会に講師として学科教員が参加した。このことによって、大学院受験者が増えた。 ②「韓国語学科映画祭」を実施し、また「桐和祭」で韓国文化展示や韓国料理の販売をすることで、近隣地域の活動と連携できるとともに、近隣地期の韓国語韓国文化に興味を持つ人々への韓国文化紹介が可能となっている。 （２）今後の課題 ①韓国語学科映画祭への大学からの支援を求めたい。 ②韓国語教育に関する講演会(韓国語教育に従事する教員への教育講座)を設定したい。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①教員の休職(育児)に伴う、教育専担の専門科目(ゼミ教育を含む)担当・委員会業務・入試業務担当を、稟議し、許可を得た。 ②教育専担の研究室手配(12月から3月)をいただいた。 （２）今後の課題 ①学部と連携しながら、学科の教員配置の検討を進めたい。 ②助手業務の検討を進める。
その他	（１）特筆すべき事項 ①韓国財団の支援によるインターンシップ生を受け入れた。 ②研究活動以外の分野で、著書(歴史小説)を出版する構成委員があった。 （２）今後の課題 ①学部教育とインターンシップ生との連携を検討する。 ②サバティカルが導入された場合の、学科教員の業務を検討しておく必要がある。 ③留学が実施できなくなった場合が生じた際の、科目の代替策を検討しておく必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	日本語・日本語教育学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ・平成31年度から日本語教育実習（選択必修、3単位、通年）を開設することが認められた。これに伴い、国内、海外の日本語教育実習先の交渉を開始。現在海外の5つの教育機関（韓国協定校3校、オーストラリア協定校など2校）との交渉が進行中である。また、平成29年度より海外の交渉中の大学と教育実習を試行し、検討を重ねながら実習プログラムを精査していく予定である。 （2）今後の課題 ・日本語教育専門科目を履修している留学生、交換留学生やDD生の日本語力の支援が必要である。また、これに対応する細かい指導や方策を検討することが重要である。
研究	（1）特筆すべき事項 ・科学研究費基盤C「成人学習論に基づく「アジアの日本語教師研修システム」の構築」採択（継続）15K02649，研究代表者：池田広子　・科研費の研究成果の一部を研究叢書として2017年3月に刊行した（『実践のふり返りによる日本語教師教育－成人学習論の視点から』池田広子・朱桂栄,鳳書房）。また、この刊行においては目白大学より学術出版助成を得た。 3)海外の学術誌及び研究叢書などに論文が掲載された（①「成人学習論に基づくラウンドテーブル型日本語教師研修の可能性―運営側の学びの考察」池田広子,『日語教育与日本学2016』第8号,華東理工大学出版社有限公司，106-113.　②「協働型の教師研修・教員養成」池田広子『《日語教学研究(日本語教育の研究)》日本学研究叢書第9巻』外語教学与研究出版社（北京),555-573.）　4)海外における国際大会で研究発表、講演などがさかんに行われた（全9件：インドネシア5件、イタリア1件、カナダ1件、上海1件、台湾1件）。5)上記の他、目白大学紀要、国際交流基金紀要、他大学紀要、学会予稿集などに論文が9件掲載された。 （2）今後の課題 ・科学研究費の採択件数（代表者）の申請と採択を増加させる。そのために研究ができる空間と時間的環境を整えること。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ・中国語学科主催の台湾康寧大学の研修における日本語教育実習の準備、引率を行った。 ・夜間中学（世田谷区三宿中学校）に学生を引率して授業見学をさせてもらった。 ・JALPにおける支援活動や東京都内及び近郊の日本語学校、地域日本語ボランティア活動で行った日本語支援の記録や省察を記述し、報告書としてまとめた（2016年2月刊行）。 （2）今後の課題 ・日本人と留学生が混在する授業では、其々が持っているリソースをうまく活用できるようにしたい。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ・NPO法人子どもLAMP(Language Acquisition Research Project：文京区）「外国人児童生徒の教科・日本語・母語支援」の活動。　2)小平市花小平公民館にて「古典を楽しむ会」、「古典の会」を主宰し、指導を行った。 （2）今後の課題 ・地域の公立小学校と連携を取りながら、外国人の子どもとの交流や日本語支援を行っていきたい。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ・平成31年度開設する日本語教育実習の海外実習先として、韓国語学科と連携協力しながら交渉を進めている。具体的には、目白大学韓国語学科がこれまで協定校（高麗大学、韓国外国語大学、韓瑞大学など）と培ってきた情報や経験知を提供してもらい、韓国側の大学と教育実習のデザインを共に検討している。 （2）今後の課題 ・平成29年度は海外教育実習を試行しながら、プログラムを精緻化していきたい。
その他	（1）特筆すべき事項 ・公益社団法人日本語教育学会を目白大学で開催した。日本語教育関係の専任教員などで実行委員会を立ち上げ、日本語教育学会事務局、学会の各部署と連携・協力して組織を運営した。これに加え、大会当日はJALP非常勤講師、日本語・日本語教育学科の学部学生、院生などが運営業務の補助を行った。大会は、国内、海外からの多くの研究者、日本語教育関係者などが来場し、盛会であった（来場者数：1，259人）。関係者に目白大学及び目白大学の日本語教育を宣伝する機会にもなった。 （2）今後の課題 ・5月より学科教員(1名）の体調不良・療養の必要性が生じ、学生委員、教職委員の代理が必要となった。これに伴い学科教員は複数の業務を兼務しなければならず、業務の過剰負担が生じた。また、当学科の教員や日本語教育センターの教員も国語教育委員会や国語の入試作問委員として、業務を兼務することとなった。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	保健医療学部

(1)特筆すべき事項。
1.学部教育について
3学科の運営を尊重しながら、毎月定期的な学科長会議、実習教育委員会、国家試験・就職対策委員会を実施し、学部として共通理解を図り、協働活動を推進した。平成28年度の活動は以下の通り。

①退学者・休学者対策を実施した結果、学部全体では退学者は前年度47名が平成28年度は26名と21名減少した。
②唯一の3学科合同授業である「チーム医療演習」は年々充実してきており、症例検討・報告をPBL方式で実施する体制を整備した。
③中山医学大学と本学保健医療学部との相互交換留学生協定の締結に向けて台湾を訪問した。平成29年夏ごろ調印予定。

2.学生数確保策
①平成29年度各学科の入学者数は理学98名（85）、作業60名（60）、言語27名（40）、学部合計183名（185）であった。言語聴覚学科のマイナス分を理学療法学科がカバーする形となった。（）内は募集人員

3.国家試験および就職に対する対策

①国家試験対策委員会を年間5回開催し、学科間で情報交換を密にした。新卒合格者は理学療法学科91.4％（90.3％）、作業療法学科94.3％（83.7％）、言語聴覚学科100％（75.9％）であった。理学療法学科は例年より低調な結果であったが、他2学科は良好な結果を達成した。()は全国平均。

4.研究について

科研費等の競争的資金獲得は前年とほぼ同様な結果であった。特別研究費による論文発表や海外学会での演題発表は増加傾向であった。

5.社会貢献

①耳科学研究所における耳鼻咽喉科診療、言語聴覚療法の実施により地域医療に貢献した。
②地域の健常者・障がい者向けスポーツ事業に貢献した。
③障害児への巡回相談事業を実施した。
④産学連携事業に参加した。

（2）今後の課題
○基礎教育科目については、新宿キャンパスの基礎教育の考え方と歩調を合わせ、平成30年度実施に向けて最終調整の段階までこぎつけた。
○3学科共同のチーム医療演習が定着した。今後は看護学部との連携・協力の検討が必要。
○国家試験対策は成果を上げ、2学科は高い合格率を示した。来年度は3学科そろっての高い合格率を目指す。そのために今後は教育推進室を活用した組織的な支援体制を整備すること。
○入学者確保策に関して、特に言語聴覚学科に関して、来年度に向けて、わかりやすいパンフレットの作成、オープンキャンパスの模擬授業の改革、入試種類別定員の見直し等の対策の立案、実施。
○研究面では、科研費等の外部競争的資金の更なる獲得と、サバティカル実施に向けた派遣者の選考方法の確立、研究環境の改善。
○社会貢献に関しては､目白大学耳科学研究所クリニックの地域貢献、目白大学発達研究会の活動の継続と拡大、さいたまマラソンへのランナーケアサポートの推進。
○中山医学大学との留学協定の締結。
○特に作業療法学科実習地の関東地方への一層の集約化。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	理学療法学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①週１回の学科会議で成績不良や実習の状況などの学生情報を学科内で共有し指導に取り組んだ. ②卒業生を呼び，OSCEを実施して臨床実習の質の向上を進めた. ③基礎ゼミにおいてレポートの書き方を徹底的に指導し，学生のレポート作成能力の改善させた. ④知識・技術定着のために講義や実技科目において頻回な小テストを実施し，学習習慣の定着を図った. ⑤平成28年度から予算の関係上，篠原ゼミを中止し，佐藤教授，照井教授，前島教授の学内教員による特別講義を実施した. （2）今後の課題 ①中退者は，以前に比べ減少しているが，さらに減少させるよう検討を加える. ②学生の学習習慣をつけるために，以前は2年生秋学期からゼミ活動を開始していたが2年生春学期からの開始を検討する. ③平成28年度理学療法士国家試験では．合格率が大きく低下してしまったために，試験対策を再検討する.
研究	（1）特筆すべき事項 ①海外の学術誌に3編が掲載された. ②国際学会に1演題を発表した. ③めまいに関する研究を目白大学クリニックを共同で実施している. ④学術学会の常任理事などの役職につき，学術活動に貢献した. （2）今後の課題 ①引き続き，科研費などの外部競争的資金を獲得する. ②個々の教員だけでなく，チームとしての研究活動を推進する. ③できるだけ多くの教員が研究活動をするように働きかける.
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①OSCEなどの臨床実習に向けた講義や実技指導を多く実施した. ②平成28年度は，国試合格率が振るわなかった. ③ディスカッションや小テストの導入などのアクティブラーニングを継続して実施した. ④3年次秋学期に保護者会を開催し，保護者とともに学生への支援を行った. （2）今後の課題 ①中途退学を防止する学生指導法方法を検討する. ②成績不良学生へのさらなる対策を検討する. ③国試合格率向上のため，各国家試験勉強グループ担当教員を配置し，きめ細かい学生指導を行う. ④2年次春学期より学生のゼミナール配置を行い，より早期からグループ学習を開始する.
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①理学療法士協会などの専門職団体の活動に複数の教員が活躍した. ②地域の知的障がい児スポーツ事業への参加した. ③さいたま国際マラソンにおいてランナーケアサポートブースを出展実施した. ④東京都障がい者総合スポーツセンター医事相談員として活動した. ⑤複数の市町村における介護予防事業に参加した. （2）今後の課題 ①様々な社会貢献活動の場を得ることができてきたので，さらにはその質についても高めたい. ②臨床実習実施施設との共同事業を検討する. ③さらに他の分野に関しても社会的貢献ができないか検討する.
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①学部長裁量経費(一部学長裁量経費)を活用して入学生の負担を軽減させた上で，東進ハイスクールの入学前DVD通信教育を開始した. ②学科内学外授業プロジェクト活動の一つとして，高校出張授業のコンテンツを開発した. ③台湾の中山医科大学との交換留学について訪台し具体的に検討を進めた. ④臨床実習時には，担任・ゼミ担当・実習地担当が多面的に学生をサポートする体制を整えている. （2）今後の課題 ①教育推進室の具体的な活用案を検討する. ②台湾の中山医科大学との交換留学について来年度中に実現させる. ③オープンキャンパス・プロジェクトの活動を活発化させ，より効果的な広報を検討する.
その他	（1）特筆すべき事項 ①日本空手道連盟ナショナルチーム強化スタッフとして教員が係った. ②大宮アルディージャと本学学生とともに地域の知的障がい児スポーツ指導を行った. ③本学科独自の同窓会組織である目白理学療法士会とともに研修会を開催した. ④本学科卒業生を招聘し，在学生へのセミナーを実施した. ⑤3年次OSCEの際に指導者として本学科卒業生を招聘し，在学生と卒業生との連携を促した. （2）今後の課題 ①さらに本学および本学科のネームバリューを上げるような活動を検討する. ②目白理学療法士会研修会は1回しが実施できなかったので，今年はさらに多くの研修会を開催したい.

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	作業療法学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①28年度作業療法士国家試験成績合格率は94％であった。過年度生以外の現役生が全員合格を果たした。 ②クリニカルクラークシップ臨床実習のさらなる改良 ・学生の実習経験自己評価及び目白大学の臨床実習に関する実習経験評価(アンケート）を作成、実施した。 ・クリニカルクラークシップ実習に合わせた教員による学生の到達度評価の更新およびそのルーブリックを更新した。 ③台湾中山医学大学との短期交換留学制度の締結 （2）今後の課題 ①国家試験合格率の維持 ②遠方の実習地を近郊の実習地へと漸次更新する。 ③Eラーニングの実現に向けて、実技コンテンツの映像化 ④臨床教育者への指導方法の教育、臨床実習方法および臨床実習にかかわるツール（評価尺度、チェックリスト）のさらなるブラッシュアップ。 ⑤台湾中山医学大学への短期交換留学の実施（3月予定）
研究	（1）特筆すべき事項 ①外部研究資金　科学研究費助成金　作業療法学科教員の研究代表者は３名であった。 ②国内を中心に多くの研究業績があった。（学会誌29件、学会発表83件） ③第2回クリニカル・クラークシップに基づく作業療法臨床教育研究会（特別講演　佐藤郡衛学長、教育講演　毛束忠由、シンポジウム）、第１回研修会（講演　會田玉美）を実施した。全国の大学より問い合わせがあり、ネットワークづくりが進んでいる。 （2）今後の課題 ①外部資金の獲得によるさらなる研究の充実 ②学会誌投稿、掲載の増加 ③クリニカルクラークシップを中心に学科として取り組む研究の計画・実施
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①基礎学年教員グループを中心に、「2年生から始める国家試験対策」に着手した。 ③国家試験合格者の就職率が100％であった。 ④作業療法研究法履修者が激減し、卒業論文履修者のさらなる減少が危ぶまれる。 （2）今後の課題 ①引き続き成績不良者、休みがちな学生への早期対応をはかり、退学者の減少をはかる。 ②今年度は着手できなかったが発達障害をもつ学生への臨床実習支援指針（合理的配慮）の作成を検討する。 ③引き続き、国家試験対策およびキャリア支援を行う。 ④作業療法研究法、卒業論文の履修者の増加にむけて、履修時期の検討を行う。 ⑤大学院進学につながる卒業論文指導の実施
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①地域（さいたま市、岩槻、浮谷地域での地域交流）との交流事業が活発に行われた。 ②地域の医療、福祉、保健行政における専門分野での貢献（保健・医療・福祉領域の講演）が多数あった。 ③学会及び研究会への貢献（講演、研修講師、研究会主催など）が多数あった。 ④作業療法学科を母体とする研究会の継続的な運営（クリニカルクラークシップに基づく作業療法教育研究会） ⑤地域社会福祉協議会への協力 （2）今後の課題 ①作業療法学科が地域社会資源の一つとなるよう個々の地域（岩槻区、さいたま市）との連携活動に有機的なつながりを持たせる。 ②地域活動への他学科、他学部を含めた教員相互の協力と学生の参加促進。 ③埼玉県作業療法学会の企画運営（29年）
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①准教授の９月退職に伴い、専任講師（本学助教）を採用した。助教の後任を採用した。 ②学科内役割グループごとの目標設定、成果報告を実施した。 （2）今後の課題 ①退職予定教授の後任人事 ②研究能力、教育能力、マネジメント能力のバランスのとれた教員の育成
その他	（1）特筆すべき事項 ・入学志願者の減少傾向 （2）今後の課題 ・入学志願者の確保 ・オープンキャンパス、出張模擬授業などの充実 ・他大学との差別化をはかるコンテンツの作成

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	言語聴覚学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 臨床実習に向けた特論授業の充実 新卒学生の国家試験100％合格 （2）今後の課題 効率の良い教育体制の確立 中途退学者の減少 国家試験の高い合格率の維持
研究	（1）特筆すべき事項 科学研究費３件の採択 （2）今後の課題 科学研究費等外部資金の獲得 すべての学科教員の学会での口頭発表や論文発表 学科として取り組んでいる会話向上プログラムについての研究の推進
学生指導	（1）特筆すべき事項 医療者、特にコミュニケーション障害のある人たちを支援する言語聴覚士を目指す学生に必要なコミュニケーション力、会話能力の向上に関して系統的な指導を実施 （2）今後の課題 社会の一員として生きている、生きていくことへの自覚をさらに促す 一般教養、常識の力を高める
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ほぼすべての有資格の教員が目白大学耳科学研究所クリニックで臨床を実施し地域医療に貢献した 複数の教員が専門性を活かして特別支援教育の支援や各種講習会講師を実施した 複数の教員が休日を利用してNPO法人で学習障害児者の臨床に当たっている （2）今後の課題 地域連携においてさらに活動を広げられるか、可能性を探る
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 これまでと同様、教員は同じ目的意識を持ち、常にコミュニケーションをとりながら教育、学科運営を行った 教員の協力体制を強化し中途退学者減少、国家試験合格率の向上が図れた （2）今後の課題 現在欠員となっている助教1名の確保に努める 教員が疲弊しすぎないように業務の効率化を進める
その他	（1）特筆すべき事項 大学進学者の人口が増えないという厳しい状況でいかに志願者、入学者を増やすかについて検討した （2）今後の課題 上記を実践する

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	看護学部

(1)特筆すべき事項
＜教育＞
・27年度に継続して、医療制度改革に伴う看護学教育改正を予測した在宅看護学カリキュラム検討を継続し、在宅看護学担当の教員確保に努めた。
＜研究＞
・埼玉県看護協会や実習場へ研究の促進及び質の向上のために積極的に教員を派遣した。
＜学生指導＞
・国家試験合格率は、看護師99.0%、保健師88.0%であった。
・就職率は、100%であった。
・在籍者の退学率は、27年度の2.9%から28年度は1.4%であった。
＜社会貢献＞
・教員の定員不足により活動が停滞し、社会貢献についての特記事項はない。
＜組織マネジメント＞
・27年度に引き続き、各高校での出張・公開授業、埼玉県看護協会や実習関連施設への講師派遣を積極的に実施した。
・任期満了者３名、自己都合退職者６名と退職者数が多いため、後任者の確保に苦慮したが、すべての教員確保が年度内にできた。
・教育推進室への事務業務の委譲により、教員の事務作業負担が軽減されてきた。
・会議の合理化・スリム化のために運営内容を整理した。
＜その他＞
・中山醫学大学への学長訪問に学部長、学科長が随行して護理学系の教員と交流できた。
・中山醫学大学への保健医療学部訪問に随行して国際交流委員長が訪問し、交流できた。
・目白大学看護学部看護学科と中山醫学大学護理学系間の学生交流に関する協定から2回目の交流（受け入れ6名、訪問4名）を実施した。

(2) 今後の課題
＜教育＞
・医療制度改革に伴う看護学教育改正を予測し、指定規則との関連や他大学の状況を配慮し、継続検討する必要がある。
・埼玉県内に新設する看護学部が今後も増加傾向にあることを予測して実習施設との連携強化に努める。
・埼玉県看護協会や地域への貢献に努め、実習施設の充実と開拓を図る。
＜研究＞
・研究的雰囲気の醸成を図り、学会誌への投稿、海外の学会発表・学会誌への投稿等を継続促進する必要がある。
・学外研究費の積極的獲得を図るために研究環境を整える必要がある。
・中山医学大学護理学系教員との共同研究の可能性を探り推進する。
＜学生指導＞
・諸種の国家試験対策教材の積極的な導入を継続促進する。
・各種の就職説明会への参加や施設見学を促し、希望の施設への100%合格を目指して、継続指導していく。特に実習病院への就職率をあげるよう努力する。
・中途退学予防のための対策を継続する。
・学生の入学動機は多様であるため、クラス担任が中心となり、早期に相談対策を行い、教科担当はもとより、クラス担任やゼミ担当、実習担当は学生との接触を多くし、個々の学生の心情を把握し、早期解決に努める。
・看護師国家試験合格率の維持・向上を目指す。
・保健師課程の選考方法の検討と、保健師国家試験合格率の向上を目指す。

＜社会貢献＞
・埼玉県看護協会とも連携し、地域住民を巻き込んだ事業の促進をはかる。
・埼玉県委託事業（健康づくり人材育成事業）の整備・促進をはかる。
＜その他＞
・定着の困難な助教については専門性を配慮しつつ、教員としての成長のための教育的配慮をもって、演習・実習指導の教員配置を検討する。
・新任教員が多いことから、教育運営への周到な配慮を行い、各領域での課題解決のため安定した環境整備に努める必要がある。
・実習場が多岐に渡ることにより、取り交わす書類の複雑化・煩雑化の合理的整理が必要。
・卒業生が教員や師長に就任している時期でもあるため、同窓会との連携を強化し、教育の人材確保や実習施設での指導の充実に繋げる必要がある。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称（評価単位名称）	看護学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ・全学共通科目を学士力の視点から検討を行った。 ・学生が主体的に学ぶ力の育成環境として、オンライン授業を積極的に取り入れた。 （2）今後の課題 ・全学共通科目の運営環境を整える。 ・他学科・学外とのゼミ交流・ボランティア活動等を検討し、学生の視野拡大および他職種理解を図る。 ・学生の主体性育成のために、アクティブラーニングを積極的に取り入れる。
研究	（1）特筆すべき事項 ・実習施設及び埼玉県看護協会等に「研究の促進と質の向上」を目的として積極的に教員を派遣した。 （2）今後の課題 ・教員各自の研究促進と学外研究費の積極的獲得について継続する。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ・看護師国家試験合格率99.0%、保健師国家試験合格率88%、就職率100%であった。 ・在籍者の退学率は、27年度の2.9%から28年度は1.4%であった。 （2）今後の課題 ・看護師国家試験合格率の維持・向上を目指す。 ・保健師課程の選考方法の検討と、保健師国家試験合格率の向上を目指す。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ・教員各自で行っている社会事業および実習施設への研修講師等の積極的参加の推進を図った。 （2）今後の課題 ・埼玉県委託事業（健康づくり人材育成事業）の整備を図る。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ・教員の欠員に合わせて定員確保に鋭意努力した。 ・教員間の協力強化のための会議組織について検討した。 （2）今後の課題 ・新たな体制での運営を図り、評価を通して効率的な会議の運営について検討する。 ・中途退学予防のための対策を継続する。 ・学生の入学動機は多様であるため、クラス担任が中心となり、早期に相談対策を行い、教科担当はもとより、クラス担任やゼミ担当、実習担当は学生との接触を多くし、個々の学生の心情の把握と早期解決に努める。
その他	（1）特筆すべき事項 ・高校への出張事業を積極的に行い、学生確保に貢献した。 ・目白大学看護学部看護学科と中山醫学大学護理学系間の学生交流に関する協定から2回目の交流を実施した。 （2）今後の課題 ・卒業生が教員や師長に就任している時期でもあるため、同窓会との連携を強化し、教育の人材確保や実習施設での指導の充実に繋げる必要がある。 ・保健医療学部との共同で中山醫学大学護理学系間との教員交流を行い、研究・教育に活かす。

別　科

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	別科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	留学生別科

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	(1)特筆すべき事項 ・留学生別科で開講する授業への参加を希望する交換留学生の増加とそれに伴うニーズに対応するために授業カリキュラムを改善（N1クラスを交換留学生にも開放） ・授業力向上を目指し、非常勤講師を交えた研究会を年2回開催（例年通り） (2)今後の課題 ・交換留学生の割合が、初級クラスでも増加しているため、学習者のニーズ、レディネスの見直しが必要
研究	(1)特筆すべき事項 【論文】 ・高橋恵利子「韓国人学習者の日本語アクセントの習得に関する研究」『目白大学人文学研究』 ・鈴木秀明Web版『日本語教育実践研究フォーラム報告』 ・鈴木美穂「交換留学生のための学習支援の取り組み―教員と学生の意識調査をもとに―」『高等教育研究』 【発表】 ・高橋恵利子「日本語学習者の発音能力診断システム開発の基礎研究」日本語教育国際研究集会 ・鈴木秀明　日本語教育国際大会（インドネシア・バリ）、アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会（東京海洋大学）、大学教育研究フォーラム（京都大学） ・「交換留学生のための学習支援クラスの試み」日本語教育学会研究集会（北海道）、ポスター発表 ・「大学における短期留学プログラムの取り組み」日本語教育国際研究大会（バリ）ポスター発表 (2)今後の課題 ・留学生別科としての日本語教育と交換留学生対象の日本語教育を融合する方法を検討する ・個別の研究に加え、留学生別科全体の課題に対して講師全体で共同で取り組む
学生指導	(1)特筆すべき事項 ・多様な学習者のニーズに合わせ、個別指導を充実させた。 ・大学進学希望者、大学院進学希望者に対して、早い時期から書類作成のための指導、面談練習などを実施。 (2)今後の課題 ・学習者への個別指導をより充実させるための体制を整備すること
社会貢献	(1)特筆すべき事項 ・落合第三小学校への訪問（地域の子供たちとの異文化交流） (2)今後の課題 ・今後も地域の学校等との交流を継続
組織マネジメント	(1)特筆すべき事項 ・プレースメントテストにコンピュータテスト（J－Cat）を導入し、プレースメントテストの効率化を図る。これまでプレースメントテストの準備、実施、採点に職員1名、任講師4名、非常勤講師5名以上の人員を必要としていたが、コンピュータテスト導入により、職員1名、専任講師4名で準備、実施から採点まですべてを滞りなく終わらせることができた。 ・非常勤講師の欠員2名を補充。授業の質を保つことができた。 (2)今後の課題 特になし
その他	(1)特筆すべき事項 学部（日本語・日本語教育学科）の学生を対象に、留学生別科所属のベテラン講師による日本語初級モデル授業を公開。学部との連携を図る。 (2)今後の課題 特になし

附属施設等

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	地域連携･研究推進センター用評価シート

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
研究	（１）特筆すべき事項 ①平成 26 年 2 月の公的研究費の管理・監査のガイドラインの改正及び、平成 26 年 8 月の研究活動における不正行為への対応等に関するガイドラインの決定に伴い、全学 FD 研修会でコンプライアンス教育としてその周知を図った。 ②上記ガイドラインに則り、倫理教育として日本学術振興会の研究倫理 e ラーニングを全学で実施。また、『学術研究倫理ガイド』を制作し、全学 FD 研修会で配付した。 ③特別研究費（長期研修制度）の制定を検討し、平成 29 年度に策定することとなった。また、特別研究費（科研費申請のための学内助成）については、これまでの奨励的経費の見直しを図り、平成 29 年度から研究成果の報告を行うこととなった。 ④戸田市との共同研究を継続。 （２）今後の課題 ①科研費採択件数が減少したため、科研費等外部資金獲得に向けた対応が必要である。 ②利益相反及び知的財産権の取り扱いに関するルールが必要である。
地域貢献	（１）特筆すべき事項 ①平成 28 年 7 月、かねてより高齢者福祉施設「神楽坂」において双方の協力のもとイベントを実施してきた社会福祉法人三篠会と包括連携協定を締結。これまでの活動に加え、介護・保育等の実習等、連携を深めてゆく予定。 ②平成 28 年 10 月、さいたま市と包括連携協定を締結。地域連携・研究推進センター岩槻分室を中心に「いわつきマルシェ in 目白大学」の開催や「さいたま国際マラソン」に協力する等、具体的な取組を行った。今後は、さいたま市が推進する都市づくり計画を軸にした地域連携やインターンシップの実施等、双方の連携強化を図ることとした。 ③平成 28 年 11 月、公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会主催の「第 39 回総合リハビリテーション研究大会」に協賛として参加。新宿キャンパスを会場として同大会を開催した。 ④平成 29 年 2 月、としま南長崎トキワ荘協働プロジェクト協議会と包括連携協定を締結。南長崎地域の 7 町会と 8 商店会、豊島区が協働で進める文化観光振興プロジェクトに今後も積極的に参加していく。 ⑤新宿キャンパスのある落合・中井地区における連携事業も継続し、遺跡フェスタ、染の小道等、地域でのイベントに積極的に係わり、連携を深めた。また、岩槻キャンパスにおいても、地域交流流しそうめん等のイベントや福祉施設でのボランティアなどを実施した。 ⑥目白大学発のフリーペーパー『MEJImag（めじマガジン)』を創刊。包括連携協定を結ぶ西武信用金庫全店の店頭等で配付した。 （２）今後の課題 ①包括連携協定の締結により、本学の多種多様な分野の知の資源を生かし、地域が抱えるさまざまな課題に貢献していきたい。ニーズが高い学生ボランティアについては、本学と地域が連携して行われる各種イベントに広く学生を募集し、対応していきたい。
産学連携	（１）特筆すべき事項 ①平成 28 年 5 月、さいたま商工会議所と包括連携協定を締結。平成 27 年度よりスタートしたプロジェクト「医療機器開発コンテスト（SMAP 事業)」を継続して実施。これは本学認定看護師教育課程の学生を対象に QOL の向上や病棟業務の効率化等につながる機器のアイデアを募集するもので、同年 11 月にプレゼンテーション審査を経て、平成 29 年 2 月に表彰式を行った。今後、さいたま商工会議所会員企業で製品化を図り、病院等において活用を推進し、社会に貢献することとしている。 ②平成 29 年 2 月、専門図書の編集・出版を行い本学教員の著書も多数手がける出版社「株式会社一藝社」及びイベント業界の専門家集団「一般社団法人日本イベントプロデュース協会」と包括連携協定を締結。学生のインターンシップ・実習の協力実施などで連携していく予定である。 ③平成 29 年 2 月「彩の国ビジネスアリーナ 2017」に 2 名の教員が出展した。 ④米屋株式会社、株式会社ナポリアイスクリームとそれぞれの学生コンテストの実施と優秀作品を商品化し、店舗において学生が販売支援を行った。米屋株式会社とのコラボ商品「ひとくち羊羹」おいては初めて学内での予約販売を行い、2,798 本（480,680 円）の売上があった。 （２）今後の課題 ①マッチングイベント等に出展し、産学連携による様々な事業を展開していきたい。 ②企業とのコンテスト、コラボ商品の方向性、参加するイベント等の見直しを行う。
その他	（１）特筆すべき事項 ①本学の話題性の高い取組み等について、教育担当記者に多く配信される大学プレスセンターを活用しマスコミへの配信を行った。 ②本学公式ウェブサイト上、地域連携・研究推進センターのページを拡充。包括連携協定の一覧や岩槻分室の取組み等を紹介する項を新たに追加した。また、不正防止への取組みのページに『学術研究倫理ガイド』を掲出した。 ③教員の地域・産学連携の実績を把握するため、ワークフロー「目標設定計画書」及び「成果実績報告書」に新規事項を追加した。 ④6 分野の研究紀要を編集・刊行した。 （２）今後の課題 ①研究紀要の編集について、各領域における編集委員会の組織強化と編集過程の見直しが必要である。 ②地域連携・研究推進センターの広報について情報発信とその方法の検討が必要である。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	エクステンションセンター用評価シート

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

(1)特筆すべき事項

①講座（新宿キャンパス）
　○他の公開講座では稀な言語としてフィンランド語・デンマーク語・台湾語を展開。
　○新宿キャンパスでは託児室を完備。

②講座（岩槻キャンパス）
　○目白大学公開講座：さいたま市との共催で行う医療系公開講座で毎回定員を大幅に超える申し込みがある。（抽選）
　　平成28年度担当していただいたのは、保健医療学部の教員で『高齢者に役立つリハビリテーションの知識と技術』と題して実施。
　　定員50名。

【所感】
①講座部門では、本学で売りにしていたマイナー言語でも長期担当していただいた講師が高齢化等の理由で、本国に帰国するため無くなる言語講座も出てきている。同等の質の高さを求めると、なかなか後任が見つからないのもマイナー言語ならではの事情であり、希望する受講生自体も減少傾向にあるため、講座を企画できても開講する人数が集まらないという事態が増えていくと予想される。
エクステンションセンターの講師陣は、ほとんどが外部講師で行っているが、現在の条件で引き受けていただける講師は減少していくと見ている。

②さいたま市との共催講座は、来年度から岩槻キャンパスで担当していただくこととなった。

(2)今後の課題

講座は、基本的には赤字になる講座は開講しないので収益は出る形ではあるが、現在の条件で講座を行っていただける講師を探すのが困難になってくると予想される。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	心理カウンセリングセンター用評価シート

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

(1)特筆すべき事項

1.相談件数
過去10年ほど相談件数は漸増している．平成18年頃はセンターの年間相談件数は1500件ほどであったが現在3000件ほどになっている．
ただここ3年は相談件数3000件台で安定している．

2.地域貢献活動
1)公開セミナー(新宿キャンパス)：7月30日　5講座実施　「ストレスマネジメント技法を学ぼう」「実践にいきる森田療法の基礎理論」「日常に生かす精神分析2」「震災後の心理支援」「WISC-Ⅳから子どもの特性を読む」
2)公開講座(和光キャンパス)：9月10日「癒しの養育を支える 親支援プログラムのマルチ展開」　講師宇野耕司
3)公開講座(新宿キャンパス)：12月3日　「性的マイノリティーを考える」　講師及川卓(外部講師)

3.センター内教育活動
相談員への臨床教育として外部講師および学科教員による事例検討会を4回実施した(6月24日，8月6日，12月7日，2月3日)

4.分室の埼玉病院事業
埼玉病院と提携した看護師等教育事業を本年度も継続実施した．

(2) 今後の課題

1.公認心理師制度への学生実習対応
平成30年度大学院入学者より公認心理師受験資格者となる予定である．当センターでの実習時間など資格取得に十分対応できるような実習体制を平成29年度より整えていく．そのために臨床実習のカリキュラムを大学院とともに検討する．

2.適性な相談件数の維持
臨床系大学院生が十分な臨床実習をつめるような来談者の質・量を確保できるようにする．来談者への相談サービスと学生実習のバランスが取れた臨床活動ができるようにしていく．

3.相談員の構成
現在専任相談員と非常勤相談員が相談にあたっているが，それぞれのケース相談及び学生指導への役割についても再考する．

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究所用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	教育研究所

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

(1)特筆すべき事項

●研究所全体における活動

１：所員会議の実施

○所員会議を年間８回開催した。岩槻キャンパスとはWeb会議でつないで実施した。

○研究所事業・業務の審議決裁及び、グループ会議の設定、公開講座、紀要の発行に関する査読などを実施した。

○会議資料や議事録などについては電子化しWeb上で共有を行った。

２：所報の刊行

○所報『人と教育』を刊行した。

・第10号の特集テーマは「学びへの支援」とした。各学科に執筆者を依頼し、多角的な視点で様々な論考が寄稿された。

・FD部門で実施した公開講座の内容を収録するなど、研究所の諸活動についての実績についても採録した。

●研究部門における活動

１：「プロジェクト研究」の推進

○以下の3つのテーマについて定期的にグループ会議を行い、課題の整理や調査の実施等、研究を推進した。

・「アクティブ・ラーニング」：アクティブ・ラーニングの実践例や他大学例の情報収集を行った。また、ラーニングコモンズに関連する調査研究の他大学例の情報収集、岩槻キャンパスにKiriができたことに伴う、ラーニングコモンズの利用実態調査を企画し、実施した（IR：学修と生活に関するアンケートと共同）。

・「E-learning」：岩槻キャンパス向けに「生物」のリメディアル教材をE-learningシステムに導入し利用した。また、他大学の医療系学部学科でのE-learning 利用事例の情報収集、リメディアル教育の推進などを実施した。従来の「学士力向上ドリルシステム」だけではなく、試験的に外部業者の「LINES ドリル」も導入し効果を検討した。

・「IR」：資料作成のため調査の企画・実施、IRパンフレットの作成、IRデータベースの整備・保守、学内各部署に対するデータの提供などを進めた。卒業生アンケート調査、学修と生活に関するアンケート調査、IRコンソーシアム調査を企画・実施した。

２：機器貸出の実施

○iPad、タブレットPCや、プロジェクタ、カメラ、ケーブルなど多岐に渡る内容で、80件の貸出実績があった。

○iPadとタブレットPCの貸出が多く、アクティブラーニングやゼミでの活用があった。

３：紀要の刊行

○『目白大学高等教育研究』の査読時に倫理規定に関する論議があり、次年度への持ち越し課題となった。

４：E-learningのリメディアル教育での活用

○特にE-learningプロジェクト研究と関連して岩槻CP の1，2 年生の利用が増加した。

○入学前教育としてはメディア表現学科、言語聴覚学科、児童教育学科での活用を支援した。

●FD部門における活動

１：公開講座の実施

○11月19日（土）にFD実施委員会と共催で公開講座を実施し、所報『人と教育』第11号に内容を掲載した。

２：文献資料の収集

○アクティブラーニング、E-learning、IRに関する文献資料の収集行った。またIRについては、学内への広報を積極的に進めた。

●IR部門における活動

１：IR部門データベースのメンテナンス

○調査したデータをデータベースに追加するとともに、データベース内のデータの整理・調整、回収を実施した。

２．学内各部署へのデータの提供

○事務部署や学部・学科などからの１７件の要請に対してデータを提供した。必要に応じて直接説明等を実施した。

３：プロジェクト研究の推進

○IR部門としてプロジェクト研究を実施し、3月に卒業生アンケートを実施するなど、多角的分析に向けた調査研究を推進した。

(2) 今後の課題

○事業が広範にわたっており、各事業を効率化することが課題である。

○e-learningに関しては、大学として方針を固め、他部署と連携を図り効果的な事業展開が必要である。

○IR事業、機器の貸し出し、E-learningに活用などの周知が徹底しておらず、広報活動が課題である。

○IR業務に関して、今後より専門的な分析、利用の増加傾向などへの対応が課題である。

○倫理規定に準拠することを前提に紀要論文の投稿を促すことを明確にしていく必要がある。

目白大学･目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	メディカルスタッフ研修センター用評価シート

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①平成 28 年度 4 月～新カリキュラム遵守開始となった。改定のねらいや内容、時間数の変更等について事前によく検討し講師選定を行った。新たに「医療安全管理」、「臨床薬理学」が必須となった。改定に伴う修了生のフォローアップを目的とし（一部）授業を公開したところ 10 名程度の参加があった。 ②平成 27 年度研修生全員が日本看護協会認定審査に合格した。昨年同様、試験問題を分析し対策ゼミや模試を実施し、不正解や苦手問題を徹底的に見直したことが結果に繋がった。 ③4 月～8 月「研修プログラム」として、一般看護師対象に、「看護実践・研究」1 回、「看護倫理」 2 回(1 回はがん性疼痛看護修了生)、日本品質管理学会共催「医療のための質マネジメント基礎講座」 7 日間計 14 回を実施した。研修全体で延べ 700 名以上が参加した。 ④昨年、当該分野も「排尿自立指導料」のチーム加算がつき、看護協会の要請により急遽フォローアップ研修を実施した。およそ 90％の修了生が受講したことから需要の高さがうかがえ、今後、受講生確保に期待が持てる ⑤一昨年より科目授業の一環としてさいたま商工会議所と研修生の医療機器開発に関するマッチング会議を実施したが、本年度からコンテスト形式とした。学内外構成員による審査委員会を設置し、学長賞、会頭賞、特別賞を設け表彰した。 （2）今後の課題 ①認定看護師教育機関の認定期間が平成 30 年 3 月 31 日に期限を迎える。教育機関更新についてはすでに学内の承認を得ているため、認定看護師教育機関審査要項に則り 4 月～オンライン上で申請を進めていく。 ②日本看護協会では平成 27 年～29 年度にかけて看護研修学校にて特定行為研修を組み込んだ新たなモデル事業開発に着手している。2 年後には分野の改変やカリキュラム改定等、認定看護師教育課程そのものが大きく変化することが予測される。日本看護協会の認定看護師制度委員会の動向をより一層注視していく必要がある。
研究	（1）特筆すべき事項 昨年、平成 30 年度診療報酬改定に向けて、本学修了生を中心とした「背面開放座位療法」に関する研究プロジェクトを立ち上げ（日本看護技術学会と日本脳神経看護研究学会共同提案）研究を継続中。 （2）今後の課題 研究結果をまとめ、学会等で成果を発表するとともに平成 30 年度診療報酬改定に向けた提案書に反映していく。
学生指導	（1）特筆すべき事項 社会人対象のため個人の背景は様々である。既婚者が多く単身で上京している者は週末や連休に帰省していた。個人面談を入学後、実習前、実習後の 3 回実施した。学業についていけるか、実習先でよいコミュニケーション関係が築けるか等の不安を訴える研修生が多かった。実習オリエンテーションを充分行い、巡回時に指導者から研修生と病棟スタッフの関係性について情報を得るようにした。今年は消極的な研修生が多い傾向にあった。しかし、実習態度は大変真面目で遅刻、欠席する者はいなかった。 （2）今後の課題 実習における積極性を養うことが課題である。本人の性格に拠るところが大きく、科目「指導」、「リーダーシップ」で学習したことが充分に活かしきれていない。認定看護師に求められるリーダーシップ能力の育成について個々の特性に応じた指導プログラムが必要と考える。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①日本品質管理学会共催厚生労働省承認「医療安全管理者養成研修」である 2016「医療のための質マネジメント基礎講座」14 回 7 日間を実施した。病院施設や大学教育機関所属の講師を迎え、センターの利便性や施設の快適さを充分 PR できた。また、研修受講生（延べ 600 名以上）には本学を知ってもらう機会となった。 ②脳卒中予防を目的とした「第 4 回市民公開セミナー‘ストップ　脳卒中！」’を開催（H28.12.10 ）した。参加者は約 80 名であった。研修生は和光市の脳卒中の動向を分析し、脳卒中予防のための集団指導案を作成、啓発劇「これでいい？塩分、運動、酒、たばこ」を上演、また、４つのブースに分かれて生活指導を行った。参加者のアンケートにも、毎年楽しみにしている、聞いた直後はよく覚えていたが忘れてしまったので何回も聞きたい、など好意的な意見が寄せられていた。その後、啓発劇を「日本ニューロサイエンス看護学会」(1/2.聖路加国際大学)、「STROKE2017」(3/18.大阪国際会議場）にて発表し、シンポジストや会場の反響は大変大きかった。 （2）今後の課題 地域に開かれた大学としてセンターの使命を果たすため、教育的事業を一層推し進めること、地域住民交流の場としてセンターを開放する（図書館の住民利用）なども視野に入れて検討していきたい。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①専任の柴本教員が 8 月末に緊急入院し、9 月開講に向けて専任教員を確保する必要があった。幸い 1 期生小林由紀恵氏に依頼することが決まり、看護学部長や学科長、事務サイドが採用手続を進めた結果、開講には何ら支障をきたさなかった。柴本教員が担当する教科目は主任（武田）と専任教員（小林）が分担し問題なかった。 （2）今後の課題 日頃から不測の事態に備え危機管理意識を持つことが大切である。しかし、それ以上にそのような状況が起きた場合にそれぞれの立場で役割を果たすため日頃の人間関係が重要であることを認識した。センター長として人間関係作りに一層努力していきたい。
その他	（1）特筆すべき事項 現在、一教育課程のみ開講し定員が満たない状況が続いており経済的問題が逼迫しているため他の分野(例　認知症看護）の開講も検討している。一方で 2015 年 10 月「特定行為に係る看護師の研修制度」が施行され、日本看護協会は 10 年後の認定看護師制度を展望し、認定看護分野に必要な特定行為を実施できることが認定看護師としての役割拡大と専門性の進化に繋がると考えている。そこで、近い将来必要とする特定行為研修を導入できるよう、平成 30 年度から共通科目の改正が決定している。 （2）今後の課題 上記について、平成 30 年度開講できるようあらゆる策を検討し実施する。